
迷い夜話

初瀬こより

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い夜話

【Nコード】

N2669M

【作者名】

初瀬こより

【あらすじ】

この世とあの世の境界、三途の川の中州にある生者と死者と異形の入り乱れる夜だけの町。

最近町に出入りするようになった遊佐と町の管理者の娘、ユズリはそれなりに平穏な日々を送っていたのだが、ある日管理者から『おつかい』を頼まれ――。

序章（前書き）

こちらは『迷い夜行』の後日譚になりますので、できれば先に『迷い夜行』をお読みください。

序章

夜だけの町。そこは生と死の狭間の町。三途の川の中州なかすにいつしか人が集まり、町の体をなした場所。ここに昼はなく、生も死もない。あるのは空虚なまやかしの享楽と隣り合わせの闇。

町には多数の橋があり、その橋がそれぞれ生きる者の世界に繋がっている。それは自身の生まれ育った日の当たる世界かもしれないし、全く知らない世界かもしれない。

様々な世界の生と死の中継地。それがこの町だ。

町には管理者と呼ばれる者がいる。その名の通り町の先にある死者が行くべき場所、冥府から町の管理を任された者だ。町の管理者の意思はすなわち冥府の意思だ。その意に逆らうことは冥府に逆らうことを意味するのだという。

そして当代の町の管理者は八年ほど前に死者となった男、生前より町に踏み入ることが可能であった特殊な人間で、町での通り名をシノという。そのシノには町での仮初の名をユズリとする娘がおり、その娘もまた生者でありながら町とこの世を行き来する人間だ。

これがつい先日、町に足を踏み入れたばかりの遊佐ゆさが最初に深くかかわった二人だ。

「おつかいを頼みたいんだよ」

実父であるシノの笑顔にユズリはこれ以上ないほど顔をしかめた。せつかく顔立ちは悪くないというのに、と遊佐は胸の内で呟くが後が面倒なので口には出さず成り行きを見守ることにした。

「他を当たってください」

ユズリはみたらし団子を持ったまま顔を反らした。しかしシノは笑顔を崩すことなく、もう一度言った。

「おつかいを頼みたいんだよ」

穏やかな声音だというのに、シノの言葉は強い。逆らう気が根こそぎ奪われるような強さがあるから不思議だ。

つい最近彼と知り合ったばかりの遊佐よりも、娘であるユズリはそれを嫌というほど知っているのだろう。串に刺さっていたみたらし団子を一気に口に入れるとそのまま縁台を立ち上がり人ごみに紛れようとした。したところでシノはその笑みを一切崩さずさらに言った。

「ユズリにおつかいを頼みたいんだよ」

紛れようと右足を前に出したところでユズリのあらゆる動きは停止した。そして心底嫌そうにシノに振り返った。

「……おつかいって？」

シノは一度にこりと笑った。

おつかい

町の中心にある塔で静かに燃える炎は濃紺。あれは町の外の空の色と同じように変化していくらしく、あの色からするに外は今が真夜中であることを示している——とは目の前を歩くユズリから聞いた話だ。

「ああ嫌」

いつも背筋を伸ばして歩く彼女が、今日に限ってはやや猫背。うんざりとした様子で町を歩く。

「そんなに嫌なのか」

一応声をかけてみると、彼女はぴたりと立ち止まって勢いよく彼に振り返った。

「ものすごく嫌！」

つい先ほどシノから言い渡された「おつかい」。その内容は確におつかいだった。遊佐はシノの常に張り付いたような笑顔とその口から告げられたおつかいの内容を思い返した。

——この手紙を町の代表者たちに渡してきてほしいんだよ。何、あまり多いと大変だからね。この数通でいいよ。皆ユズリも面識のある相手だから簡単なものだろう？ ああ、ついでに遊佐くんにも町と彼らを紹介してあげなさい。

子供のおつかいだろう。間違いない。

何度思い返しても遊佐はそう思うのだが、当のユズリにとってはそうではないらしい。

「この町の代表者なんて、お父さん含め曲者を寄り集めた集団みたいなんだから」

ユズリは深く溜め息を吐いてシノから渡された数通の封筒の宛名に視線を落とした。

筆で書かれたらしい字は遊佐でも読むことのできる漢字、あるいは片仮名だ。だが残念ながらそれらの名前にはまるで覚えがない。

「そう言えばこの町に郵便制度は？」

「一応あるわよ。ポストみたいなものがあって、それぞれに担当がいて時間ごとに配達してくれる。でもそれだと今一つ確実ではないけど。途中で配達人……大抵は飛脚ひきやくって呼んでるけど、飛脚が裏通りに入り込んでそのまま行方不明になったりしちゃうから。本当に大事な要件なら自分で行って直に伝えるのが一番」

そのまま行方不明……相変わらず無駄に危険な場所だ。

口にせずにそう思った遊佐の前方で、ユズリがまた大仰に溜息を吐いた。

「裏通りって言えば、このうち一通は確実に裏通りなのよね。あーあー嫌だ嫌だ。面倒くさい」

ユズリはぼやきながらシノに渡された封筒の宛名に視線を落とし、
ていく。

「一番マシなのは……うん、どうせ用もあつたしここから行こう」

「で、どこへ？」

遊佐の質問にユズリは胸を張って答えた。

かなものや
「金物屋よ」

八卦院 1

十二階建ての塔を左手に曲がつてしばらく。人やそうでないもの
が行きかう道のさなかでユズリは歩みを止めた。それから遊佐に振
り返り、硝子のはまった引き戸の手前にかかる「金物」と書かれた
暖簾のれんを指差した。

「ここ。この店は町で一番の金物屋。冥府公認のおおだな大店の」

少しばかり上機嫌にユズリは言い、暖簾をくぐり引き戸を開き店
内へと入って行った。遊佐もその後を追うと、店内は本店というわ
りに閑散としていた。天井からレトロな形のランプがひとつだけ下
がった店内は薄暗く、決して広くはない店内のそこかしこには鍋や
ら包丁のような料理器具、大工道具のようなものや、遊佐には使い
道の想像もつかないような金属製品が置かれている。

「いらつしやい」

どこかおざなりな印象の声が店の奥からした。

物珍しさに店内を見回していた遊佐を置いて、ユズリは声のした
奥へと進む。遊佐もその後にとくと、店の奥は障子で隔てられた座
敷になっており、半分開いた障子の隙間からは真っ白な頭が覗いて
いた。

老人かと思つた矢先、白地の浴衣に濃い藍色の帯をした小柄な人
物が顔を上げて障子を開いた。そして現れた人物を目にし、遊佐は
軽く目を見張った。

「何だ。ユズリか。久しぶりだな」

そう気安い調子で話す白髪の人物。だがその姿かたちはどう見て
も十歳かそこらの子供にしか見えない。まるで雪のように真っ白い
髪の下には、金をそのまま嵌めこんだかのような黄金色の大きな双
眸。それらの容姿は遊佐を軽く困惑させるには十分だった。

そんな初対面の客に気付いたのか、白髪の少年は金の目を遊佐に
向け見上げてきた。

「ああ。そっちの餓鬼が噂になつてゐる鉄砲打ちか」

「噂つて？」

ユズリが不審げに訊き返すと少年は畳に胡坐をかきながら言った。
「お前、この間心中未遂を起こした向こうからの逃亡者相手に刀狩りしただろ？ その時お前を手伝つた餓鬼がいて、しかもシノ公認だつて最近じゃもっぱらの噂だ」

「お父さん公認で何？ 遊佐はただの人探しよ。その面倒を私が見てるの」

「へえ」

八卦院 2

少年はしげしげと遊佐を眺め、「ユズリの相手じゃ大変だろう」と言ってきた。

まったく少年の言うとおりだったので素直に頷くと、ユズリに後頭部を軽く小突かれた。

「あんた達二人して、それどういう意味よ」

「そのままの意味だ」

子供らしからぬ落ちつき払った態度で少年は言い、仕切り直すように膝の上に頬杖をついて遊佐を見た。

「それで小僧の名前は？」

小僧というのは遊佐のことらしい。明らかに自身より年少なのだが、この町では当たり前の常識など通用しないということを遊佐もいい加減良く知っている。なのでわざわざ少年の小僧呼ばわりに反発したりせず答える。

「遊佐」

「あんた、どう見ても子供に小僧呼ばわりされてるんだから、そんなに素直に答えるのもどうなのよ？」

案の定ユズリは一般常識の範囲で遊佐を測ろうとするが、遊佐自身はそこまで常識人ではなく、また順応性も高いほうだと思っている。むしろそう言うユズリのほうが自分よりもほど常識的なのかもしれない。

「でもこの子供は子供じゃないんだろ？」

遊佐がそう言うのと、少年は金色の両目を大きく見開いてからまるで猫のように笑ってみせた。

「へえ。お前はまだこの町に通って日が浅いんだろう？ それでよくお前たちの世界の常識から外れて考えられるな。ユズリより見所あるぞ」

「ちよっと。何で私よりこいつのほうが見所あるのよ。失礼なこと

言わないでくれる？」

ユズリの不平にも少年はどこ吹く風だ。

「この町では常識を捨てるのが上手くやっていくコツだからな」

「完全に常識捨てたら残るは無法だけじゃない」

不満げに言うユズリの言葉を大人びた笑みひとつで軽く流し、少年は改めて遊佐を見た。

「俺は八卦院^{はっけいん}。この町で金物屋を営んでいる。ありとあらゆる金属を扱っているから、小僧も何か金物が要り用ならうちに来い」

「八卦院はこんなナリしてもう数百年単位でこの町にいるらしいわよ」

まだ顔に不満の色を滲ませながらユズリは言った。

「私たちと同じ世界出身だしね」

八卦院 3

「お前はまたそうやって人の素性をぺらぺらと」

八卦院はうんざり顔で溜息を吐いた。

「どうせここに通っていれば気付くことでしょう？ 私はお父さんから遊佐の案内を任されてるんだからいいじゃない」

「そりやそうだがな。未来の管理者がそんなことじゃ周りに示しがつかないぞ」

「はあい。注意しあす」

まったく気のない返事をするユズリに八卦院は諦めたように真白い頭を掻いた。

「それで？ 今日は何の用だ？」

ユズリはまだ不満そうにしていたが、少年の言葉に思い出したように声を上げた。

「そうそう！ 今日の私は二つばかり大切な用事があるのよ。ひとつはお父……管理者から」

「シノから？」

少年は片眉を持ち上げて聞き返した。

「そう。はい、これ」

ユズリはカバンから「八卦院」と書かれた封筒を取り出して少年に手渡した。

少年は封筒を受け取ると丁寧に封を開け、白地の味気ない便箋に視線を落として行った。

「集会か。裏の参百伍拾貳月丑寅日、捌朱の刻……随分急だな」

日時のことらしいが、遊佐にはそれがいつを示しているのか想像もつかない。以前シノが奇妙な時計を持っていたのを見たことがあるが、それを見てもこの町にどのような時間が流れているのかはさっぱりわからなかった。

「相変わらずこの町の時間の数え方はよくわかんないわ。この間ま

で半の廿にじふ月ごちつきじゃなかつたの？」

すぐ隣でユズリが同じようなことを呟くのを耳にして、この町での先達にあたる彼女でもそうなのだから、そう簡単に理解できるようなものではないということくらいはわかったが。

「だから言つたろ？ この町でうまくやるコツは常識を捨てることだつて」

そう言つた八卦院の手にあつた便箋がポツと音を立てて燃え始める。遊佐が声を上げる間もなく便箋も封筒も跡形もなく燃え尽きていた。

八卦院 4

「燃やしちゃっていいの？」

ユズリは別段驚いた様子もなく尋ねる。

「内容は覚えてたしな」

僅かに手のひらに残った灰をはたき落としながら八卦院は答えた。二人のやり取りから察するに、手紙は勝手に燃え始めたわけではなく八卦院の意思により燃えたらしい。こんな町だ。手から発火することが出来る者がいても驚くまいとも思ったが、同じ世界出身と言われた相手に手品まがいのことをされるとやはり驚かざるをえない。ただし遊佐の場合、それが表情には出ないのでユズリも八卦院も気にする様子もなく何事もなかったかのように話を続けてしまうが。

「それで二つ目の用ってのは？」

八卦院の黄金色の目がユズリを見上げると、彼女は堪え切れないといった様子で笑顔になって目をきらきらと輝かせた。

「今日は新しい刀を買いに来たの」

揚々としたユズリに反し、八卦院の反応はそっけないものだった。

「うちは武具の類は扱ってないぞ」

だがユズリの笑顔は曇ることなく、その声音が沈むこともない。まるで歌うように続けた。

「そんなことを言わないで。ここは白いあなたの店なのだから」

傍から見ている分には意味のわからない遣り取り。

だが実際には意味あることなのだろう。八卦院は立ち上がり、素っ気ない目が店の奥へと向けられる。

「上がれ」

「うん」

促されるままにユズリはその場で靴を脱ぎ、奥の座敷へと上がった。

「遊佐もいい？」

「ああ、まあシノのお墨付きの餓鬼だしな」

八卦院はお前も上がれ、と言って座敷の奥へと消えていった。

「よかつたじゃない。基本、八卦院の本店は一見お断りなのに」

「本店？」

「そ。この奥がそう」

そう答えたユズリは今までで一番機嫌が良いように見える。

本店とやらに行くことがそんなに嬉しいのか知らないが、あまりもたもたしていて機嫌を損ねることもないだろう。疑問を口にしないまま、遊佐も靴を脱いで座敷に上がった。

八卦院 5

八畳の座敷の奥には何の変哲もない襖ふすまがあり、八卦院はそこに立っていた。

遊佐とユズリが座敷に上がり、店と座敷を仕切る障子が閉められたことを確認すると、彼は静かに襖を開けた。途端、ユズリの目が輝く。遊佐は再び目を見張る。

「お望みの道具を選べ」

八卦院だけが淡々とした調子で襖の向こうを顎で示した。

「…… 武具の類は扱ってないって」

「だから言っただじゃない。基本、一見さんお断りって」

遊佐の呟きにユズリは上機嫌に答え、襖の向こうへと踊るように進んで行った。

襖の向こうに広がっているのはどう見ても最初に見た店内より、今いる座敷より広い板張りの部屋だ。そしてその広い室内の随所に様々な長さの日本刀に槍、弓矢、鉄砲と様々な武器が置かれている。「素人に武具を持たすと面倒を起こすことがあるからな。ある程度理解している奴にしか見せない方針を取っているんだ」

「さつきユズリが言っただ、白い何たら？」

「本当に理解が早いな。その通り。あれは合言葉だ」

八卦院は腕を組み、壁に寄り掛かって言った。

「言っただろ？ うちはあるとあらゆる金属を扱ってるって。武具の類も大概は金属を使っているからな。うちで扱う対象になるってわけだ。この町では武具の所持には帯刀許可、使用には抜刀許可が要る。あの合言葉は許可と共に得られるようになっていてから、俺はそれを物差しにしているんだ」

「そんな大層な話でなく、趣味の一環みたいなものでしょ？」

夢中になっているようで二人の遣り取りを聞いていたのか、白木造りの長刀を眺めていたユズリが楽しげに言う。

「八卦院は人を茶化したり化かすのが好きだものね」

「人を化かすの……狐か狸みたいだな」

何気なく言った一言に、ユズリと八卦院が固まる。かと思えば八卦院は何か言いたげにユズリを睨み、それから逃れるようにユズリは別の刀へと視線を逸らした。

八卦院は額に手を当てて溜息を吐いた。

「お前って奴は……」

八卦院 6

「や、遊佐が勘が良すぎるんだって」

そんな二人のやり取りを見ていた遊佐の頭にひとつ考えが浮かぶ。
「もしかして八卦院は狐か狸なのか？ いや、白いから狸というよりは狐か？ そう言えば白狐は商売繁盛がどうのこうのとか……」

「ユズリー」

眉間にしわを寄せ、八卦院は子供には不似合いな凄みのある低い声を発した。

さすがのユズリも焦ったように弁明する。

「ち、違っ。これは本当に遊佐の勘が異常なの！ 普通の素人だったらそこまで考え及ばないって！」

「ああ、その様子だと本当に白狐なのか」

「！ ほら、八卦院がわかりやすすぎるんだよ！」

ユズリはこれ幸いと八卦院に言い募る。

「もっとポーカーフォイスで上手いことぼかしちゃえばよかったのに、あからさまに怒ったりするからいけないんじゃない」

八卦院は一瞬言葉に詰まったかと思えば、開き直ったように胸を張った。

「黙れ。そもそもお前が余計なことを言ったから流石の俺も動揺したんだ。どうしてくれる」

「うわー責任転嫁。大人げない」

形勢逆転したユズリは嫌みったらしく言う。

「そんなだから代表者の中で一番わかりやすいとか言われるのよ」
「なっ」

八卦院は悔しげに顔を歪めた。その様を見て、ユズリは勝ち誇った表情で武器の物色に戻って行った。

後に残された遊佐は横目でそっと八卦院の様子を伺った。怒りに燃えているのではと思いきや、意外にも彼は悪童を見守る大人のよ

うな顔でユズリを見ているだけだった。

「……俺、余計なことを言いすぎたか？」

遊佐の問いかけに八卦院は顔を上げずに答えた。

「いや。お前はただ賢くて勘が良かった。それだけだ」

あっさりとした口調で八卦院は言った。そして遊佐を見上げた。

八卦院 7

「だけど気をつける。素直で勘の良すぎる奴は、この町じゃ面倒事に巻き込まれる率も上がるだろうから」

黄金色の双眸は鋭く、彼が心底忠告してくれているのがわかる。

「確信なく他者の正体を口にするのは慎んだほうがいい。そうだな。藪を突いて蛇を出す結果になるかもしれない」

「名前と正体と……この奴らは随分と秘密主義なんだな」

「そりゃそうだ。特に名前はこの町において命も同然。お前も気をつけるよ？ 下手な奴に名前を知られたら地獄に百篇落ちるより酷い目に遭う」

「それは随分大変そうな」

「ああ。だからせいぜい気をつける。これは先住者からの忠告だ…

…ユズリ、何か探しているのか？」

八卦院が声をかけると、数振りの日本刀を抱えていたユズリが振り返った。その眉間には一本の皺。

「……ない」

「あ？ 何が？」

八卦院が聞き返すと、ユズリは刀を置いて大げさに身振り手振りをつけて説明し始めた。

「ほら。あの鐔が牡丹と蝶の意匠で、刃文は丁子、柄巻は紫系の菱巻、黒塗りの鞘の大刀！」

必死の形相で遊佐にはわからない文言で説明するユズリに、しばらく考えていた八卦院は呑気にポンと手を叩いた。

「ああ、あれか。あれなら昨日売れたぞ」

ユズリの目が転がり落ちるのではないのかというほど大きく見開かれる。その上、口を開けたまま完全に停止してしまったのだから、相当にショックだったのだろうということが窺える。

思えば初めて会った時にもユズリは言っていた。自分は物に対す

る執着が人一倍なのだ。

「……だ」

震える声でユズリは言葉を絞り出す。

「誰が買ってたの……？」

「顧客情報を軽々しく流すのはな……まああいつはそんなこと気にしないか」

八卦院は独りごちてから面倒くさそうに顔を上げて言った。

八卦院 8

「折継」

瞬間、すっかり生気をなくしていたユズリの目がかつと見開かれる。勢いよく八卦院の前まで歩いてきたかと思えば彼の細い肩に両手を置いた。

「……あいつが買って行つたの？」

その声は先ほどの八卦院にも負けないほどに低い。ユズリというのは実に喜怒哀楽に富んだ女だ。

「お、おう。昨日、ふらつと来て適当に見て、じゃあこれくれて

……」

彼女の勢いに気圧されたかのように八卦院は目を泳がせる。

「先月の刀狩りの報酬が出たら絶対あれを買うつて決めてたのに……

……そのためにせつせと刀狩つたのにっ！」

獣の咆哮のごとき勢いで叫んだかと思えばユズリは勢いよく八卦院の肩を揺さぶり始めた。

「あいつは今どこ！？ 今日はどこをほつつき歩いてるの！」

「し、知るかよ……刀を新調していったってことはか、刀狩りじゃないのか……」

体をかくかく揺らされながら八卦院は律義に答える。それで彼女が満足したのかはしれないが、八卦院の肩から手が離された。

「わかった。じゃああいつから直接買い戻せば問題ないわけね」

「売れた商品については責任負わないからな。当事者同士で勝手にやってくれ」

乱れた襟元を正しながら八卦院が言うと、ユズリは勢いよく手近にあった太刀を手にして踵を返した。

「これ、しばらく借りるわ」

「おい。金は」

「後払いでよろしく！」

「あんまり遅くなったらシノに言うからな。ちゃんと返しに来いよ」
八卦院の苦言もそこそこにユズリは踵を返した。彼女の案内の下で町を歩くよう言われている遊佐も八卦院に軽く頭を下げ、その後を追った。

そして再び静寂の訪れた店内で元白狐の金物屋は今更ながら、ユズリに話したことはまずかつたかもしれないと軽く後悔し始めていた。

町の問題児二人の間に火種をつけて放り投げた形だ。こればかりは二人次第だが、せいぜい二人が大人の対応をし、他者へ被害が広まらぬことを祈るばかりだ。

売った品物は彼の物ではなく、彼が責任を負うこともない。彼の流した品物がどのような面倒事を起こそうと彼が関知することはない。

「しかしユズリを焚きつけたのはまずかつたか……」

これで彼女が面倒のひとつも起こせば、間違いなくあの管理者から嫌がらせを受けることになるだろう。火のついたユズリを相手にもう一人の問題児が煽るような真似をしないでくれればいいが。

そう思ってから、それは無理だろうと結論が出て八卦院はもう一度溜息を吐いた。

考えてどうこうなるものでもあるまい。町で金物屋を営み始めて数百年。面倒な顧客はいなかったわけではない。ユズリ達はその中でも上位の位置するだろうが、この町で商売する以上、それくらいは覚悟の上だ。

「俺が楽しめる範囲の面倒事で済ませてくれよ。餓鬼ども」

八卦院 8（後書き）

今回で八卦院編？ はおしまいです。そして次の奇人変人曲者の話へ移りたいと思います。

この迷いゝの世界観自体が全力で趣味に走って生まれたものなのですが、出てくる登場人物たちにも本当に好きな要素を好き放題ぶち込んでいます。八卦院は迷い夜行を書いた後最初に生まれた奴です。あー変な奴になっちゃったなあと当初は思っていたのですが、次に書く奴に比べたら八卦院はまともです。恐ろしいことに。

それではここまでおつきあい下さったあなたさまには心より感謝を。よろしければ続きもおつきあいいただければ嬉しいです。

赤い線

八卦院の店を出てユズリが進んだのは、十字路以外に十二階建ての塔から放射状に伸びた無数の小道のひとつだった。これが裏通りなのかと尋ねると、塔に直結している道は裏通りではないと教えてくれた。

「まあ十字路よりは危険だとは言われてるけどね」

片手に八卦院の店から借りてきた刀を携え、ユズリはやや早口で言った。その横顔を窺ってみれば、即座に距離を取りたくなるほど不機嫌な顔をしている。さっき目当てだったらしい刀が既に人手に、それもユズリとはあまり相性のよくないらしい人物の手に渡ったと知ってからずっとこの調子だ。

「とりあえず遊里ゆりのほうへ行ってみるわ」

「遊里？」

「遊女屋とかが集まっている区域。あのバカのことだから、あの辺にいる確率が無駄に高いわ。そんなに奥まっつてはいないけど裏通りだから気を引き締めていかないと、引かれるからね」

答えながら苛立ってきたのか、ユズリはさらに肩を怒らせた。機嫌は悪いが性分なのか、律義に答えてくれることは助かる。

「遊女屋っていうと、この間の心中未遂の奴がいたような？」

「そう。でもあの店は十字路から少し入ったところにある店だから、遊女も客も町に深く関わるようなのはいなかったと思う。でもこれから行くのは十字路から外れた裏通りにをねぐらにしているような奴が行くような場所。遊女も客も、狐と狸ばかりよ」

「狐……八卦院みたいなの？」

遊佐の言葉に、ユズリはくるりと振り返って不機嫌な顔を見せた。「今のは比喻表現よ、比喻。よく言うでしょ？ 狐と狸の化かし合いとか。そういう奴らのこと」

「ああ」

呑気な遊佐の答えに、ユズリは再び前を向いて歩きだした。

シノや八卦院がユズリはいまいち甘いというようなことを言っていたが、それはこの美德ともとれる性分によるものがあるのかもしれない。少なくとも遊佐はシノを相手にしてユズリのように望んだ情報を引き出せる自信はない。シノはまさに、狐も狸という喻えを具現化したような存在だ。

ふいに思う。この町でシノによって与えられたユズリという道案内のような存在を失ったら一体どうなるのだろう。名を名乗らないという最低限の原則を知っている、この調子ではすぐに町に巢食う闇に取って食われるかもしれない。

シノは遊佐の人探しの事情を聞いて、出来る限りはすると言ってくれたし、冥府のお偉方も協力してくれるようなことを言っていた。だがそれからは梨の礫だ。遊佐が町に來た原因はいまだ見つからない。焦る気持ちはあれど、最近はこの夜の町を歩くこと自体を楽しんでいる自分もいる。

常識が通用せず、不気味な極彩色に彩られた混沌とした町。

普通ならば好んでいるような場所でもないはずなのに、毎夜町を訪れるうち、この混沌に安寧を見出すようになってきた。そして同じように考える町の住人は意外に少なくないらしい。

不思議な町だ。

どう考えても危険でしかない場所なのに。あらゆるものが集まるからかこの町は何物も拒まない。そのためか。この町では受け入れもらえる。此岸にあぶれた者も、彼岸に渡り切れぬ者も。あぶれ、歪んだ者達は一切を拒まぬ場所に居場所を求めて集うのか。

すれ違う人間も、人間ともつかぬ者も、彼らはなぜここにいるのだろう。遊佐やユズリのように朝が来れば元いた日常へ帰ることもなく、この町こそが日常の場となっている者は少なくないという。彼らも生死の狭間にしか居場所を見つけられなかったのだろうか。

「――遊佐？」

気付けばユズリが怪訝な表情をこちらに向けて立ち止まっていた。

「何よ、いつにも増してばーつとして。ここ、越えんとすぐよ」

「……ああ」

ユズリの指差すほうを見ると、行き止まりと示すかのように赤い線が一本引かれていた。これはどういう意味なのかと一瞬疑問に思ったが、ユズリは気にせずまたいで行つたので遊佐もその後が続いた。そのまま少し歩いたかと思えば、急に道が開け、唐突に高い笛の音や三味線に似た音、女たちの艶やかな呼び声や男たちの喧騒が耳に入ってきた。

「これは」

「ここがこの町最大の遊里よ。さっきの赤い線は遊里直結つて意味なの。健全な青少年が来るようなところじゃないからね」

溜息まじりにユズリは言い、より一層色鮮やかに賑わう夜の町を睨み据えた。

「さあ。あのバカはどこにいやがるのかしら」

半眼で辺りを見回しながら、ユズリは一番手近にあった店へと歩き出した。その店の入り口の隣には格子がはまっており、その奥から艶やかに着飾った遊女達が客引きをしている。見世というのだと教えてくれたユズリは町に入ってから一層惘然としている。

「おや、シノの旦那のお嬢さん」

格子の向こうの遊女が煙管を片手に真つ赤な唇で笑む。

「こんな所に来るなんて珍しいね。旦那のお使いかい？」

遊佐よりもいくらか年長らしい遊女は、客引きに熱心な他の遊女たちより一歩退いた所から声をかけてくる。

「折継を探してるの。今日はここへ来ている？」

「継橋つぎはしなら見かけたね。もう少し奥へ行くと飛天屋ひてんやって廓くわがあるんだが、そこにいると思うね。最近よくあそこへ出入りしているようだったから」

「そう。ありがとう」

ユズリが礼を言いポケットから握りしめた手を差し出すと、遊女はにっこりと笑って手を取った。

「毎度あり」

開かれた遊女の手には金と銅の硬貨が数枚。

「そっちの旦那も今度は寄って行っておくれよ？」

遊佐は曖昧に頭を下げてユズリと共に見世を離れた。

酔っぱらい千鳥足の男達とすれ違いながら、遊佐とユズリは延々と遊女屋に囲まれた道をまっすぐに歩き続ける。

「あれは情報料か？」

結局聞き出した情報は他人のもののように聞こえたが。

「そうよ。遊女サン達は職業柄、酔っ払いやたがの外れた男を多く相手にしたりするから色々な情報を持っている。下手な裏通りの情報屋よりも知っていることも多いの。とはいえ女も怖いからね、うまくやらなきゃ出費ばかりかさんで気付いたらすっからかんよ。時々バカな男が情報買いに来たんだか女を買いに来たんだかわからなくなつて、無一文になつて店から叩き出されたりするそうよ」

バカよね、と呟いてユズリは先へ進んだ。

折継 1（前書き）

これから始まる『折継』には残酷な描写を含みます。苦手な方は閲覧をお控えくださいますようお願いいたします。

折継 1

＊

徳利とっくりを手に微笑む姿は艶麗。艶めいた切れ長の漆黒の双眸。白く塗られた肌に主張する紅の引かれた形よく弧を描く脣。遊女らしく化粧は濃い、男が見てきた女達の中でも一、二を争う美女だ。これほどの器量ならば最高位の遊女であつてもおかしくないだろうに、目の前の継橋という名の遊女は新入りらしく、気に入りの遊女の手が空くまでの繋ぎとしてやってきた。今でこそそのようなだがいずれは彼女もまた高位の遊女となり、大枚を叩かねば顔も拝むことが出来ぬようになるのだろう。

仄かに辛みのある香りが緋色の地に地獄絵図を描いた着物から漂ってくる。頭の芯から痺れさせるような蟲惑的な香だ。

「さ、どうぞ」

継橋は少し低めだが澄んだ声で酒を勧めてきた。男は遠慮なく手にした盃を飲み干す。すると継橋は眦まなじりを下げ、感嘆の声を上げた。

「よい飲みっぷり」

言葉少なな彼女は率直に褒めてくる。同じ言葉でも、雄弁な者より口数の少ない者からのほうが嬉しいものだ。男は気をよくして更に酒を呷った。

その都度継橋が喜ぶので、一升瓶を何本も開け、気付けば本命であつたはずの遊女が存在などすっかり忘れ、足もと覚束ないまでに酔いが回っていた。

「旦那様は御酒にお強いので」

継橋は酒を片づけながら笑む。

「何、これくらい男なら当然だ」

自分でも何を言っているのかよくわからないが、とにかく気分がいい。こんなに良い気分で酔つたのは久々だ。

男は畳の上に寝転がって上機嫌にくつろいでいた。

「そう言えば」

ふいに継橋が口を開いた。

「御酒に悪酔いされて、御法度の刀をお抜きになる方もいらっしゃるそうですよ。怖いものです。旦那様がそのような方でなくてわたくしは嬉しゅうございます」

「そりゃあそうだ。俺はそんな野蛮な奴じゃないぞー」

大口を開けて笑いながら、男は継橋の肩に手を置いた。

「それより、青桐あおぎりはもういい。今度からはお前を鼻屑ひいきにさせてもらおう」

折継 2

「お言葉は嬉しゅうございますが、そうは参りません。旦那様は青桐姐さんの一番の旦那様じゃございませんか。それではわたくしが姐さん方に叱られてしまいます」

「何、そんなこと関係ない。お前はいずれ青桐よりも上に行くぞ」

「ですが今は所詮は新人り……女の世界は厳しゅうございます」

目を伏せ、哀しげに口にする姿はどこまでも悩ましい。憂い顔もまた良い女だ。

「な、何。お前に無体なまねをするような女がいれば、俺に相談するがいい！ そんな女は俺が何とかしてやろう」

「何とか……？」

顔を上げた継橋の顔は憂いを帯び、潤んだ目元はほんのりと赤い。男は心臓が音を立てて鳴るのを感じながら声を張り上げた。

「そつだ！ お前に無体なまねをするような者は、女といえどもこの俺が切り捨ててやろう」

「旦那様は、抜刀許可をお持ちなのでございますか？」

男は慌てて懷から短刀を差し出した。

「そつとも！ まあだいぶ古いものではあるが……ああ、ほれ見てみる。この短刀。この刀は既に俺に逆らった不遜な輩の血をごまんと……」

男の言葉は続かない。

何だ、風が起きたようだったが。男がそう思った瞬間、ごとりと重たい音が座敷にひとつ。何の音かと男が音のほうへ視線をやる、そこには短刀を握った腕が一本。

それはどこかで見た物体だ。腕からは血が流れている。まるで今しがた切り落とされたばかりのようだと思いながら、男は自身の違和感に気付いた。

恐る恐る、違和感のほうへと視線を遣る。そこには血が噴き出す、

肘から下を失くした自分の腕。

「……うあ、あああああ！」

「白白ご苦労さん」

明朗な声と共に赤い唇が歪む。

それは先ほどまで憂い顔でいた継橋の顔。なのに、それはまるで別人のように悪鬼めいた笑みを浮かべ、そしていつからかその手には血の滴る抜き身の脇差^{わきざし}。

一体何が起きたのか。心臓が早鐘を打ち、涙を流しながら整わぬ呼吸で男は継橋を凝視していた。

「さあ、狩らせてもらおうか。無認可者の旦那様？」

酷く楽しげで残忍な響きの声の一時後、飛天屋に悲鳴と轟音が響き渡った。

折継 3

＊

遊佐たちが飛天屋と看板を掲げた小さな遊女屋の入り口を引き、店の中へと足を踏み入れた瞬間のことだった。階段の下の奥部屋から轟音と共に小太りの男が転がり出てきた。そして店の人間がざわめく間もなく、赤い影と光が一閃。

次の瞬間には醜い悲鳴が響き渡り、小さな影が男の体から切り離されたかのように赤を撒き散らして舞い上がった。

「うわあああああつ！ た、たす、助けてくれえっ」

小太りの男の肌蹴^{はだけ}た着物の袖からは血が滴り落ちる。その袖に本来通されたはずの腕を見ることはできない。男は両の肘から下が無い。男から舞い上がった影……肘から先の腕の片方は赤く濡れて遊佐のすぐそばに転がっていた。

事態を理解した遊女達が甲高い悲鳴を上げ、我先にと入口へと逃げてくる。

そんな中、遊佐はひとりそこに立ち尽くしていた。男の後に奥部屋から現れた、赤い着物を纏った長身の女。——それは遊佐がこの町へ足を踏み入れた目的そのものか。

そう意識すれば、ソレから目を逸らすことは出来ない。抜き身の刀を手に、廊下を必死に這ってくる男に冷ややかな視線を向けた遊女。

——赤い打ち掛けに赤い束巻きの脇差を持った、真っ赤な唇の女。赤に笑む、赤を愛した……。――

「あれはあんたの探している奴じゃないわよ」

狂乱の中に場違いな程落ちついた声が遊佐の思考を遮る。

つられるように遊佐が顔を上げると、厳しい表情をしたユズリが遊佐を見ていた。

「あれはあんたの探している奴じゃない。あれは――」

強い語調で念を押すように繰り返したかと思えば、ユズリは滑るように大きく踏み込んでいた。長い髪が宙を舞い、左手に握られていた鞘から刀身が抜かれる。抜かれた刀は赤い衣の遊女へと向かっていく。

全ては一瞬。

ユズリが抜刀したのも、赤い遊女が手にしていた脇差で己に向けられた刀を防いだのも。刃同士がぶつかり合う硬質な音がして、ようやく一瞬に起きたその出来事を理解するに至った。

「私の探していた奴よ」

折継 4

殺気立ったユズリを避けるように小太りの男が泣きながら遊佐の足もとまで腹這いになって寄ってきた。その間も二人の女は刃を引く様子はまるでない。

「相変わらずえげつない狩り方してるじゃない」

先に口を開いたのはユズリのほうだった。酷く不機嫌な声だ。苦もなく彼女の刃を受け止めた遊女は赤く塗られた唇を緩めた。白塗りの顔に濃い化粧に、高く結い上げられた黒髪を飾る仰々しい簪^{かんざし}と堅気とは到底思えないが、舞台に立つ気高い舞姫のような凛とした雰囲気を身に纏い、切れ長の瞳はその刃のように鋭い。

冷静になってよくよく見れば確かに遊佐の探す相手とは随分と違った雰囲気の人物だった。この町に迷い込んだであろうあの赤い女が持っている脇差の束巻きはあの遊女のものとは違ってやはり赤一色だったし、何よりもあの女はあんなにも鋭く生氣に満ちた目はない。

「……そちらは相変わらず慈悲深くてらっしゃる」

低すぎ高すぎない声が皮肉めいた笑みを漏らし、遊女は刃を退いた。

「あんたはやりすぎだって言ってるのよ。無駄に騒ぎを大きくして他者を巻き込むんじゃないわよ」

険しい表情のままユズリも刀を鞘に納めた。

対照的に優美な笑みを浮かべた遊女は遊佐の足元で震える男に一瞥を寄越して言った。

「問題ないと思うけどな。当代管理者の帯刀抜刀許可がないことは確か。その上で抜刀した旨を自白したことだし」

「だからと言って無関係な人まで巻き込むんじゃないわよ。だいたいいくら無認可者だろうと両腕を切り落とすなんてやりすぎよ。あとと片づけなきゃならない番所の苦労も考えなさいよ」

ユズリは廊下の血だまりと物のように転がった男の腕を見てさらに眉を顰めた。

形だけで笑みを作りながら、冷え冷えとした目で遊女は言った。「この町はそういう場所。我が身惜しくば大人しく現うつの世に。あるいは彼岸へ渡ればいい。それをしなかったのはこの男の意思で、この町の数少ない決めごとを破ったのもこの男の意思。管理者の施す法は唯一の治安維持のための掟。それに逆らうことは己を守る術を自ら放棄すること。つまるところ、自業自得だろう?」

遊女は視線を外に向け、近くにいた店の下男らしき男に担架の用意と医家、番所の者を呼ぶよう指示した。そして下男や店の外にいた野次馬達が駆けて行く中、ユズリは黙って口を引き結んだまま遊女を睨みつけていた。遊女はそれを静かに受け止める。

この二人の力関係は遊女のほうが上なのか。猟奇的な現場を目撃してしまつた他の遊女達が口元を押さえたり失神したりしていく中、遊佐もまた呑気にそんなことを想っていた。

一人険悪なユズリは遊女を睨みつけたまま、低く呟いた。

「……狩り終わったのなら、その趣味の悪いお遊びも終わりにしたら」

遊女は目を細めて笑う。

「高尚な趣味だろう?」

「悪趣味以外の何物でもないわよ。どうせまた狩る前に酒でもたかつてたんでしょ」

ユズリの問いに遊女は薄い笑みを浮かべた。それを肯定と受け取つたらしいユズリは、やっぱり悪趣味だと呟いた。

「じゃあユズリもうるさいし、着替えてくるとしようか。ああ、この短刀どうする? 何ならユズリが師匠のところか番所に持っていくでもいいけど」

遊女が差し出した短刀は刀の束で払われる。

「何が愉快であんたが狩つた刀を私が持っていくのよ。冗談も大概にししないと本気で斬るわよ」

怖い怖い、と笑いながら遊女は奥の部屋へと戻って行った。

「この片づけは全部あいつにさせよう」

ユズリは目を据わらせてそう言い、女将にその旨を伝えて早々に店を出てしまった。

折継 5

＊

飛天屋の前は一時騒然となった。

道行く者たちは怯えるように足早に立ち去って行く。ユズリとも対等以上に渡り合ったあの遊女はこの町では名の知れた存在なのだと他の遊女が話していた。

閑散とした見世の格子に寄りかかりながら横目で隣を窺うと、憮然とした顔で腕を組んだユズリがいる。店を出てから一言も口にはしないが、苛立ちはひしひしと伝わってくる。

短気で幼い性質だが、彼女の剣の腕は確かだ。実際遊佐も何度も目の当たりにしているし、そのような話は町のそこかしこで聞こえてくる。そのユズリを子供のようにあしらう遊女。

生きている——実際の意味ではわからないが、少なくともこの町ではそうとしか見えない男の両腕を斬り落とし、それに対し何の抵抗も持たない。

今さらながら、未恐ろしい場所だ。

無認可の抜刀、帯刀に関する町の管理の厳しさは知っている。だがそれを差し引いても躊躇うことなく他者を傷つけることができ、なおかつ己を保つことが出来るだけの精神力をもつ相手。

「……最近の女は怖いな」

「は？」

思わず漏れた独り言にユズリは店を出て初めて口を開いた。

「何か言った？」

ユズリは眉を吊り上げて遊佐を見上げてくる。

地雷を踏んだかもしれない。そう思っても後の祭りだ。

「……最近の女は強いんだな、と」

ここは正直に答えるしかあるまい。下手に誤魔化せばユズリはま

すまず機嫌を損ね、さらには遊佐に当たりに来ることは目に見えている。だが今のユズリには何を言っても同じことらしく、眉をひそめて吐き捨てるように言った。

「何から言うべきか迷うところだけど、女が強くなったんじゃなくて男が弱くなっただけでしょ。それからその最近の「女」は誰を指して言っているの？」

「それはもちろんユズリとさっきの遊女……」

途端、ユズリは舌打ちした挙句に「また馬鹿が一人」などと呟いた。そして顔を上げてまくしたてるように告げた。

「さっきの遊女の名前はオリツグ。手紙を渡しに来た町の代表者の一人。継橋とか遊女としての名前もいくつか持っているみたいだけど、あいつは遊女でも何でもなく、遊郭で男を騙して遊ぶのが趣味の馬鹿よ。どこが馬鹿かと言われたら一言じゃ言い表せないほどだけど、まず一個上げるとしたら、あの馬鹿の性別について！」

「はあ」

気のない遊佐の相槌にも構わずユズリはさらに続けた。

「いい？ あの馬鹿は」

「バカバカ言っていると自分がバカになるぞ」

場違いなほどに呑気な声がユズリの声を遮った。

折継 6

番所の者やらが出入りして慌ただしい店内から出てきたのは大刀^{たち}と脇差を手にした若い男だ。暗めの茶髪に英字のプリントされたTシャツの上に羽織ったレザージャケットにジーンズと若者らしいありきたりな格好だが、この町では遊佐とユズリ同様若干浮いて見える。

少なくとも外見年齢はユズリよりは若干上、恐らく遊佐とそう変わらない。外見年齢などこの町ではあまり意味はないだろうが。

その顔には薄い笑みを浮かべているが、印象的な切れ長の目はやはり鋭い。……印象的すぎるせいだろうか。この目を見るのは初めてではない気がするの。

「あんたなんか百回馬鹿って言ったって知能指数が一だって下がるわけないでしょ」

早速機嫌の悪いユズリが毒づく。

「相変わらずユズリはかわいいくらい可愛げがないなあ」

男は矛盾したことを言いながらもにこにこ笑っている。デジャビュというやつだろうか。秘かに首を傾げる遊佐に気付いたユズリは怒鳴るような調子で言った。

「あんたまさか、まだこの馬鹿に気付いてないの!？」

「え、あ？」

「この馬鹿がさっきの遊女よ! こいつは女装して馬鹿な男にたかって貢がせて、拳句の果てに刀狩りと称して暴拳を働く無法者なの!」

「さっきの」

改めて男の顔を見てみれば、中性的な顔立ちの中で印象的な切れ長の目は確かに先ほどの遊女と同じで、化粧こそしていないが確かにあの遊女と重なる……気がしなくもない。

歌舞伎の女形を思えば、確かに先ほどの遊女はそれとよく似た雰

困気をしていた。

「女装、だったのか」

言われなければまず気付かなかっただろう。化粧の腕やよく出来た鬘かつらだったせいもあるのだろうが見事な化けっぷりだ。そしてやはりこの町は奇妙で面白い。

男もしばらく遊佐の顔を見てから驚いたようにユズリに視線を戻した。

「何だ。ユズリ、いつの間に男が出来たんだ？ どこで引っかけてきたんだよ。師匠は知ってるのか？」

「遊佐はそんなんじゃないわよ。知ってて言ってるでしょ」

「うん。例の人探しの鉄砲打ちだろ？」

平然と男は答えた。それがまたユズリの癪に障り、今にも噴火しそうになっている。

だが男は一向に気にする様子もなく、遊佐に顔を向けてきた。

「そんなわけでさっきはどうも。俺は折継。あんたの名前を聞いても？」

「……遊佐」

折継 7

「ユサ？ 普通に名字や名前にありそうだけど本名なわけないよな？」

折継は目を丸くして聞いてきた。

「当たり前じゃない。何わかりきったこと聞してるのよ」

呆れた様子で言うユズリに折継は軽く溜息を吐く。

「ユズリはどうしてそう刺々しいことばかり言うんだ？ そんなじゃそのうち顔まで刺々しくなるぞ？」

「あんたに対してだけよ」

誰に対してもだろうとは思ったが言わない。言ったら棘で滅多刺しにされる。

「まあいいや。よろしく、遊佐。師匠から噂は聞してる。俺も次の管理者候補の一人だから何かあったら言えよ」

折継はユズリの機嫌など気にする様子もなく、遊佐に笑みを向けた。

「師匠？」

「ああ、シノさんのこと。昔からあの人には世話になってるし、俺あの子の跡継ぐ気満々だし師匠って呼んでるんだよ」

笑顔で折継は言う。が、それとは対照的にユズリの表情はますます強張った。

「ちよつと。お父さんの跡を継ぐのは私だつて何度言わせる気？」

不穏な空気を背負ったユズリが遊佐と折継との間に割って入った。この類の話題に関して、ユズリの元々低い沸点はますます低くなる。今も噛みつかんばかりの勢いで折継を睨みつけている。だが折継は余裕の表情で受け流す。

「いやいや。それを決めるのは冥府のお偉方だから」

「冥府のお偉方だってあんたみたいにふざけた奴に町の管理を任せようなんて博打ばくちに出るわけじゃないじゃない」

「柔軟性に欠けるユズリより確実に俺のほうが向いてるって」

折継は笑顔で恐ろしいことを言ってる。恐ろしい男だ。絶対にわざとユズリを怒らせている。横目で見てみれば、案の定ユズリは肩を震わせながら何とか今にも手にした刀を抜きそうなのを堪えているようだ。一応無闇やたらに抜刀しないようにする程度の良識があつたのは意外だが。

「あんたみたいなのが管理者になったら途端に町の治安が悪化するわよ」

「ユズリが管理者になったら途端に小狡い連中に付け込まれて町が荒れそうだな」

にこにこにこにこ。

本当にこの折継というのは大した男だ。笑顔でこれほどまでに人を焚きつけるとは。ユズリの言っていた曲者くせものの寄せ集めというのもなまじ彼女の誇張表現ではなかったらしい。

折継 8

「それって私が小狡い連中より知恵がないみたいじゃない」

「そうは言ってないって。ただユズリは若干単純だからなあ」と

きらきらしい笑顔から吐き出された言葉に、とうとうユズリは刀の束に手を掛けた。

「刀を抜きなさいっ！ 今ここであんたとは決着をつける！」

ああ、キレた。こうなっては遊佐にはもうどうしようもない。傍観する以外に術はない。

さて折継はどう出るのか。

予想通りというべきか、空気を読まないというべきか。彼は気の抜けた表情で言った。

「えー面倒くせえー」

「いいから抜きなさい！ 私には構えてもいない人間相手を斬りつける趣味はないの」

「いやいいって。構えても構えなくてもどうせまた俺の勝ちだし」

「……また、ってことは、あんたはユズリに勝ったことがあるのか？」

つい遊佐が口を挟むと、折継は笑いながら言った。

「ああ、もうユズリには何年も負けてない。負けたのは本当にガキの頃だけでさ、少なくともこの八年くらいは負けた覚えなし」

「うっ、うるさいわね！ あれはあんたが汚い手ばかり使うから！」

顔を真っ赤にしてユズリが怒鳴り散らす。そして射殺さんばかりの目で遊佐を睨みつけてきた。

「あんたも余計なこと言ってるんじゃないわよ！ この馬鹿が調子に乗るでしょ！？」

「相変わらずユズリはお子様だなあ」

しみじみと折継は呟いた。もちろんユズリがそんな言葉を聞き逃すはずもない。

「誰がお子様よ！」

すさまじい剣幕で怒鳴りつけるユズリに、通りを歩く者たちは災いを避けるように道の端に寄って行った。他者に無関心な町だが、己に害が及びかねないともなれば他者の動向も気にするらしい。

しかし折継にとってユズリの怒りなどさしたるものではないのか、尚も余裕の表情で穏やかに答えて見せた。

「そういうすぐ怒るところと、自分に都合の悪い事実を捻じ曲げて解釈しようとするところが」

まさしくその通りなのだが、子供は自分の非を認めたがらないものだ。例に漏れず、お子様と称されたユズリはますますもって怒りを募らせていく。

折継 9

「あんたが人を怒らせるようなことばかり言うからでしょ！？」
「そうだ！ あんた私が目をつけてた刀まで持つて行ったでしょ！？」
「あれは私が買ったつもりだって言ったでしょ！」

ユズリの視線の先には折継の手にある大刀。

折継はあーと声を上げて自分の手元を見た。

「ユズリもこれが欲しかったのか。ごめんなーてつきり違うやつのことだと思つて俺が買ったやつだよ。何なら譲つてやろうか？」

明らかに子供を相手にしたような態度に、ユズリは肩を怒らせる。

「っあんたのお情けなんていらないわよ！」

「え、そのためにここまで来たんじゃないわかったのか？」

遊佐の呟きに、ユズリの殺気に満ちた視線が飛んでくる。

「違う！ こんな奴のお下がりなんてこつちから断固拒否よっ」

「んー何かよくわかんねえけど、ユズリは刀のために俺に会いに来たわけじゃないのか？」

「あんたになんて会いに来てないわよ！ たまたま私の行き先にあんたが存在しただけ！」

「いや……手紙渡すんだろ？」

埒の明かなそんな会話に遊佐が口を挟むと、ユズリは手紙の存在を忘れていたのか一瞬固まり、折継は不思議そうに聞き返してきた。

「手紙？ ユズリから？ 珍しいな。ラブレター？」

「そんなわけないでしょ！ 管理者からよ」

叩きつけるように手紙を渡し、ユズリは横を向いた。

「代表者達に渡すように頼まれたの」

「へえ。師匠から」

折継は手紙を広げながら見世の壁に寄り掛かった。

「集会か。代表者全員強制参加つて随分物々しいなあ」

「嫌なら代表者なんてやめちゃいなさいよ。私がその後釜について

やるから」

離れた所から憎まれ口を叩くユズリに、折継は楽しげに目を細める。

「ユズリにはまだ荷が重いだろ。ま、俺が管理者に昇格した後は代表者にしてやってもいいけどな」

ユズリのこめかみがぴくりとひきつる。

折継 10

なぜこの男はこうまでもユズリを怒らせてくれるのか。町を出るまで彼女と行動を共にすることが原則の身にはだいぶ迷惑だ。まずは何とかしてユズリを折継を離れさせるべきだろう。

「ユズリ」

「何っ!？」

いつそ天晴れなまでの怒りっぷりにこれ以上関わりたくない気持ちぐむくむくと溢れてくるが、残念ながらそうもいかない。この調子で放っておけばいつまで経っても用事がすまないだろう。

「手紙を届ける相手はまだいるんだろう？ そっちはいいのか？」

とりあえずの遊佐の言葉にユズリははっとしたように遊佐のほうへ振り返った。まさかとは思うが、怒りで我を忘れたついでに手紙のこともすっかり忘れていたのか。

「い、今行こうと思っていたところ！」

ユズリは誤魔化すように大きな声で言うてからもう一度折継を睨めつけた。

「私はまだ用事があるの。今日は見逃してあげるけど、次に過ぎた狩り方をしていたら管理者に直談判してあんたを出入り禁止にするようにしてやるわよ。あんたみたいのがいたらこの町の治安は悪化の一方よ」

「手厳しいねえ」

折継はくつくつと笑ってから、手にしていた大刀を差し出した。

「そうそう。この刀、俺には使いにくかったから八卦院に返しておいてくれないか？ やっぱ俺にはこれが一番いいや」

そう言った折継の視線の先には一振りの脇差。つい先ほどユズリの太刀を受けたばかりのものだ。

「自分で返しに行けば？ だいたい八卦院が引き取り拒否したらどうするのよ」

ユズリは慔然と答え、差し出された大刀を受け取る気配も見せない。

「それはユズリに任せるよ。ってわけでよろしくな」

にこやかに折継は言い、強引にユズリの手に大刀を握らせた。そして満足げに笑った。

「うん。華やかな意匠だし、ユズリに似合うな」

その声音に揶揄や嫌みは感じられない。恐らく純粋な褒め言葉に、ユズリも渋々と握らされた大刀を納めた。

「じゃあ俺は番所でさっきの無認可の奴について話してくるからこれで。またな」

意外なほどあっさりと折継はその場を後にした。

やはり変わった男だ。

ユズリは納めた大刀を複雑な顔で見ていたが、顔を上げて折継とは反対方向へと足を向けた。

「行くわよ」

「刀は返さないのか？」

「基本的に八卦院の本店に返品制度はないの。逆に引き取り料取られちゃうもの。だったら私がこのまま使ってあげた方がいいでしょう？」

そう答えたユズリの声はさっきまで不機嫌さをまるで感じさせない軽やかなもの。

これは機嫌が直ったということか。彼女という人間はわかりやすいのか、わかりにくいのか。

ユズリは代表者というのは曲者の寄せ集めと言っていたが、その曲者の中には間違いなく彼女も含まれている。もっともユズリ自身は決して認めないだろうが。

折継 10（後書き）

折継編これにて終了です。自分の書いたものの中で女装男が出てきたのは初です。歌舞伎の女形さんの美しさは本当にため息ものなので、折継もぜひそんな感じで皆さまの脳内で変換していただけると幸いです。性格は大変性悪ですが、外見なら一級品なんです、たぶん。

しかし改めて考えてみるとユズリは怒ってばかりですね。絶対カルシウム不足です。もう少し冷静になると折継とももうちょっとうまくやっていけるのではと作者ながらに思っています。

それでは若干血なまぐさくもなってしまった折継編におつきあいいただきましてありがとうございます。

裏道への曲がり角

さて、前を歩くユズリの足取りは心なしか軽い。八卦院の元から借りてきた大刀を遊佐に持たせ、今その手にあるのは折継から受け取った大刀だ。

あれほど怒り狂っていたにも関わらず、今はそんな素振り微塵も見せずに鼻歌でも歌いだしそんな勢い。まるで子供のような感情の起伏の激しさだ。

それにしてもあの折継という男もつくづく不思議な男だ。遊び半分にユズリの逆鱗に触れまくり、かと思えば最後には怒髪天を衝いたユズリの機嫌を途端に直してしまうのだから。

「折継だっけ？ あいつとは付き合いが長いのか？」

「んーそうね。初めて会った時はお互い幼稚園か小学校かって頃だったと思う」

それは随分長い付き合いだ。どうりで慣れた調子で騒いでいたわけだ。

「うちのお父さんと折継のお父さん、今は先代折継って呼ばれてるけど、二人が顔見知りだね。割と小さい頃から町で会うことが多いっただのよ」

懐かしむように目を細めてユズリは言う。

珍しい。

こんなに上機嫌なユズリを見るのは初めてだ。やはり折継は只者じゃない。喜怒哀楽の『怒』が九割方で構成されているような彼女が見るからに浮かれている姿など想像もつかなかったというのに。町の代表者とやらを務めるのだからやはりそれなりに優れた人物だということか。

「そう言えば、代表者っていうのは何のことだ？」

「え、何を今さら」

大げさなりアクションでユズリは振り返った。

「何だ。知っててついてきたんじゃなかったの？」

「代表者なんだから何かの代表で、お前の父親が俺に案内しろっていう相手なんだからそういうものだろうと思ってた」

遊佐はわざわざ積極的に自分の疑問を解消しようというタイプではない。必要であれば自分から答えを求めることもあるが、この町に関してはシノに任せた方が自分で行動を起こすより賢い選択だと思うからなおさらだ。

「てっきりお父さんから話を聞いてるんだと思ったわ。まったく。あのおっさんも娘任せにしないでちゃんと初心者に説明くらいしてほしいものだわ」

呆れまじりにユズリは息を吐いた。

「代表者っていうのはまあそのままずばり町の住人、あるいは私たちみたいに定期的に町に来る連中で構成されているの。定期的に管理者を中心とした会議があつてね、代表者たちはその会議で意見する権利を持っている。たとえば町のどこそこで問題が起こっているとか、ここにはこんな条例を敷いたほうがいいんじゃないか、とか。昼の世界でいう市議会とかそういう感じかしら」

「あーこの町にもそんな民主主義があつたんだ」

「ここ数代の管理者の意向でね。管理者によつては独裁政権みたいなのを好んで代表者制度を廃止していた人物もいるって聞くけど、ひとりでどうこうできるような町じゃないのはあんたもよく知ってるでしょ？ 町に根付いた協力者がいるとないじゃ管理の効率も全然違うってものなのよ」

「ああ、八卦院は店持つてるし、やっぱり町の住人には詳しいのか」

「もう随分長いことこの町にいるしね。客層もけっこう幅広いし。折継なんかはまあさつきも見たとおり、色町に入り浸って女装して刀狩りしてついでに情報も取ってくるから重宝されてるみたい。裏通りにも通じてるって話だし」

機嫌は直つても折継を褒めるのは抵抗があるのか、少し不満げにユズリは言った。

「私も全員と付き合いがあるわけじゃないけど、皆町にそれなりの影響力を持つてる奴ばっかよ。良くも悪くもね」

「はあ」

良くも悪くも、という言葉が引つかかるが。確かに先ほどの折継の様子を見た限りでは良い意味で影響力があるという感じではなかった。八卦院はこの町ではまだ良識ある人物といった感じだったが。「じゃあこれから会いに行く奴はどんな奴なんだ？」

狐の金物屋に女装無法者の刀狩り。これ以上の曲者など想像もつかない。

そもそも先の二人は人間と同じ姿をしていたが、町を行き交う者達を見ればどんな妖怪変化が出てきてもおかしくはないのだ。今も遊佐とすれ違った、顔に無数の目がある大男が長い舌を伸ばして辺りを飛び交う鬼火を食っているし。

「ああ、これから会いに行くのは薬種問屋をやってる奴。まあ善人とは言い難いけど、悪い奴じゃないわよ。折継あたりと比べたらかなりの常識人だし」

ユズリの言う常識人とは一体どの程度からなのだろうか。そもそもこの町で『常識人』と言っているいい人物などユズリを含め会ったことがないのだが。

遊佐がひとり思案を巡らせている前をユズリは話しながら進む。

「まあ裏通りで主に商売してるっていうのが面倒なところなんだけどね」

ユズリは軽く息を吐き、闇に包まれ先が見えない横道の前で立ち止った。

「ってわけで、さあ行くわよ。裏道」

クチナワ 1

その暗い一本道を入れば急に辺りが薄暗くなる。外から見た時のように真つ暗闇というわけではないが、やはり大通りよりも暗く明らかに大通りとは違った空気だ。目深に外套を被った者、値踏みするような視線を送ってくる者、遊佐たちの存在など気にも留めない者とまばらにだが人通りはあるが、どこか閑散とした雰囲気で、時折白い鬼火がふわふわと浮いている。

遊佐は隣を歩くユズリを横目で見た。心なしか彼女の表情はいつもより厳しく、必要以上に伸ばされた背筋から緊張が伝わってくる。裏通りは危険な場所で一筋縄ではいかない連中がたむろしていると聞いてはいたが、常に饒舌なユズリが黙って道を歩くとは。裏通りの雰囲気悪さよりむしろそちらのほうが驚きだ。

「ハハツ。見るよ、ガキが火遊びに来たぜ」

「悪いこたあ言わねえからとっとと帰った方が身のためだぜ。逢引きならよそでやんな」

道行く二人に下卑た声がかけられても、ユズリは眉ひとつ動かさず彼らの声に足を止めることもない。

「おいおい。せっかく親切に忠告してやってるのに無視かあ？」

「かわいくねえガキ共だな、おい。ここらは乳臭えガキが来るには百年早えぞ」

顔中を包帯で覆った緑色の皮膚をした男がユズリの肩に手を置いた。

ユズリは眉間に一本皺を刻みながら男の手を払い落とし、まっすぐに男を見上げた。

「クチナワはどこ？」

「あ？」

「薬種問屋のクチナワ。今日はどこにいるの？」

ユズリの問いに、明らかに狼狽した様子で男達は顔を見合わせた。

「……あいつの居場所なんて聞いてどうするんだ？」

「会いに行くに決まってるでしょ。そうでなければわざわざこんな所に来たりしないわよ」

ユズリは眉を吊り上げて辺りを見回した。

「お前ら、まさかあの野郎の知りあいか……？」

「浅い付き合いではないつもりだけど」

堂々と言ったユズリを見て男達はさらにざわめき、一人の男が意を決したように路地の奥を指した。

クチナワ 2

「そ、そのつきあたりを右に行つたところで今日は見かけた」

「そう。ありがとう」

どこにも謝意など感じられないような素っ気ない声でユズリは言い、男の指差した路地の奥へと歩き出した。遊佐も黙ってその後に続く。

そうも簡単に信じていいものなのかと疑問に思ったが、背後からひそかに聞こえてきた言葉にいらぬ心配だったことを知った。

——管理者の娘だよ。間違いいねえ。あんな態度でかい小娘なんて二人といねえよ。

——あれだろ？ この間の刀狩番付で折継と並んだ記録を打ち立てた女だろ？ あんなナリしてよう、気に入らない奴は容赦なくぶった斬るって話だぜ？

——マジかよ。あんなガキが？

——バカ！ 聞こえたらどうすんだ！ いいか、あのガキには関わらない方が身のためだ。何つっても背後に管理者もいやがるんだからな。触らぬ神に何とやらだ。

——ったく。クチナワに折継にあのガキに、管理者の周辺てのはろくな奴がいねえ。

なるほど。日頃のユズリの素行に加え、こんな場所でも多大な影響力を持つシノの存在あつてか。そしてこれから会いに行くクチナワとやらも彼女らと同類らしい。

「随分有名人なんだな」

「管理者の娘だし、うちはこの町と縁が深いからね。前回の刀狩番付で記録更新したからまた少し名前が売れたわ」

まっすぐ前を向いたままユズリは大した興味もなさげに答えた。

「刀狩番付？」

「一言で言うなら、誰が一番刀狩りましたランキング」

「ああ、そう言えば刀狩好きなんだっけか」

確かシノが以前そのようなことを言っていたはずだ。

「報償ももらえるしね。無法者はム力つくし、たまには刀振らなきゃ勘も鈍るし。まさか昼の世界で斬り合いなんてできないし」

「銃刀法違反で即逮捕だな」

「そういうこと」

ユズリは当たり前のように答えるが、彼女なら昼の世界では木刀でも携えて歩いていそうだ。さすがに口に出しては恐ろしいのではないが。

クチナワ 3

「じゃあクチナワって奴も帯刀してるのか？ ここの連中も随分怯えてるし、何か理由があるんだろ？」

「クチナワは帯刀してないわよ。多分許可もないし」

事もなげにユズリは言った。

「裏通りは他人に害になるあらゆるものが横行している。クチナワは薬種問屋だから、まあ危なっかしいものも扱ってるのよ」

ユズリが言うにはクチナワと名乗る男は薬種問屋を営んでいて、薬と名のつくものなら火薬から毒薬、さらには麻薬に似た依存性のある薬種。彼が独自の調合をした薬などありとあらゆるものを扱うため、冥府からは若干危険視されている。現在代表者の地位にいるのも監視という意味を込めてもあるのだろうとのことだ。

通常クチナワは裏通りで胡散臭い輩を相手に商売をしている。だから彼に会いに行くには必然的に裏通りに行かなくてはならない。近年はまだ大通りに近い辺りで商売してくるから探すのはそう大変ではないだろうが、裏通りには厄介なものも多いのでできれば避けて通りたい道なのだという。

ところが今日は比較的運気が向いているらしい。さっきの男の言った通り、突き当りを右に曲がったところでユズリの表情が年相応にぱっと明るくなる。

その視線の先には薄暗い路面に小さな壺や箱をいくつも置いている露天商。宙に浮いた提灯がその露天商の横顔が照らす。

「クチナワ！」

その名に一瞬周囲の空気が凍りつくが、ユズリは一切気にせず男に駆け寄った。

「久しぶり、クチナワ」

「シノの娘か」

短い黒髪に鷹のように眼光鋭い男はにこりともせず顔を上げた。

上半身は黒の腹掛とタンクトップの中間のような衣服の上に、赤地に金系銀系で流水文が描かれた袷纏を纏っているのに、下はブラックジーンズという和洋古今折衷の服装の奇妙な男だ。

まだ若く見えるのにその表情は厳めしく、元々鋭い目元がより一層恐ろしげに映る。さらに両の手の甲には鱗が生えており、うなじには大きな目がある。

クチナワ 4

「ユズリだってば。いつまでもお父さんのオマケ扱いしないでって言ってるでしょ？」

「そりゃ悪かったな。で、今日は何の用だ？ 管理者の警告通り、最近は商品も客も選ぶようにしてるぜ？」

「それは結構。で、今日のご用はその管理者から代表者のクチナワへお手紙」

そしてユズリは達筆な字でクチナワと書かれた封筒を彼に差し出した。

クチナワはそれを受け取ってから、ユズリの後ろにいた遊佐に目を止めた。

「何だ、珍しいな。男連れか」

別に不機嫌ではないらしいが、無駄に威圧的な風貌と抑揚に欠ける声のせいで愛想良くは見えない。遊佐もそれに関しては人のことを言えないが。

「遊佐っていうの。人探ししてるんだってさ。赤い打ち掛けに赤い束巻きの脇差持った迷子、知らない？」

「さあな。残念ながらそれっぽいものはお目にかかったことがない。情報屋でも当たったほうが現実じゃねえか？」

「まあね。ま、それはそれとして手紙見てよ。何か集会あるみたい。八卦院がそんなようなこと言ってた」

「八卦院もか。俺まで召集される集会つても久々だな」

さしたる関心もなさそうにクチナワは封を破って中の便箋を開いた。

「……確かに。集会の召集だ」

「ちゃんと出席してよ？ あんまり無断欠席が多いと代表者権剥奪されるからね」

「わかったわかった。それはそうとせっかく来たんだ。何か買つて

いけよ」

「えー別に欲しいものないんだけど……ああ、遊佐。あんた確か今、火縄銃持ったために許可を申請してるじゃない。どうせ許可は下りるから、今のうちに火薬でも買っておいたら？」

「ああ……そっか」

危険を身を以て経験したこの町では、護身のために何か持っていたほうがいいだろうと助言してくれたのはユズリだ。その場でシノに許可申請を出し、一応手順を踏むからまだ時間はかかると言われたが申請が通ることは決定事項らしい。こういう時管理者の娘を道案内にもらってよかったと思う。

「火薬な。じゃあこれなんてどうだ？ 少量で通常の倍以上遠くまで飛ばせるし破壊力も上がる。安くしといてやるぜ？」

にこりともしないが、商売人らしい言葉だ。

「じゃあそれをもらう」

「毎度あり」

クチナワ 5

全く愛想のない客と店主の会話に、ユズリは呆れがちに言った。

「無愛想が二人もいると、こつちまで顔の筋肉が凝り固まっちゃいそう」

「そうしたら弛緩剤になる薬を売ってやるよ」

黒い粉を麻袋に詰めながら淡々とクチナワは答える。ユズリの皮肉になど慣れているのだろう。かわし方に余裕を感じる。

「私の世界だと筋弛緩剤って毒物のイメージも強いんだけど」

「薬ってのは使用法次第で毒にも薬にもなるもんだ」

「そりゃまあそうだけどね。でもクチナワの薬は問答無用に凶悪な毒も多いじゃないよ」

「害虫退治のための薬だからな」

「クチナワの言う害虫ってのは人語を話して二足歩行する奴も含まれてそう」

「さて。どうだろうな」

何だか目の前で随分と恐ろしい会話が交わされていた気がするが、やはり気のせいではないのだろう。なるほど。裏通りに入った時の男達の怯えようの理由が垣間見えた気がする。

それにしてもユズリは随分この男に対し好意的だ。明日には全世界が滅ぶのではないかというくらい珍しい。辺りに浮かぶ提灯に照らされる顔はいつものような仏頂面ではない。それだけでも奇跡のような気がするのに、皮肉めいたクチナワの言葉に皮肉で返さない、おまけに怒り出さない。あの傲岸不遜な態度がなりを潜めている。

…… 一体何事だ。

不気味すぎて冷や汗が垂れそうだ。

その間もユズリは店先にしゃがんで恐ろしいほど上機嫌にクチナワに話しかけている。

「それでさっきまで折継のバカに会ってたの。もうね、あいつ本当にバカ！　また身体欠損までさせてね。いくら無認可者相手だからってやりすぎだっと思うのよ。代表者があんな無法者でどうするのよね」

「あいつの噂は裏通りでも随分聞こえてくるな」

「悪名高い奴よね。相変わらず女装して男を騙して遊んでるし、何であんな奴が代表者だなんてうちのお父さんも頭がおかしくなったとしか思えないわ！」

「シノの判断だ。間違っていることはないだろう」

「クチナワはお父さんを過大評価しすぎじゃない？」

クチナワ 6

「俺ごときの評価に見合う以上の実績と実力を持つ男だよ。お前の父親は」

「すごいのは認めるけど性格悪いよ、お父さんは」

「善人じゃこの町の管理者なんてやってられないだろうからな。管理者としてこれ以上なく適任だろう。事実、俺が町に住み始めてから一番住みやすくなったのはシノが管理者になってからだ」

「ふうん」

会話を聞いている限り、クチナワというのは遊佐たちと違ってこの町に住んでいるのか。

しかもシノが管理者に就任する前から。わかつてはいたがこの町で外見年齢というのはつくづく当てにならない。

もともとクチナワは遊佐たちとは違う世界の出身か、もしくは八卦院のように狐だとかそういった類なのだろうが。そうでなければ手の甲に鱗が生えた上、うなじに三つめの目がある人間などいやしないだろう。昼の世界で言う妖怪だとかそういうものののだろうか。

黙々と火薬を袋につめる作業を繰り返すクチナワをじっと見てみる。

人間で言うなら年の頃は二十代後半といったところか。うなじと手の甲さえ見なければ普通の人間と変わらないように見える。うなじの目には瞼はあるが睫毛はない。体中に目のある妖怪とは確かこんな感じの目で描かれていたな、と遊佐は昔読んだ絵本の記憶を辿る。その目は常にぎよろぎよろとあちこちを見回している。正面でユズリと会話しているクチナワの顔についた両目とは全く違った動きだ。

「ねえ、クチナワはまだこの町にいる？」

ユズリは唐突にそんなことを口にした。クチナワは軽くユズリを

見たがすぐに視線を火薬に落とした。

「さあな。少なくとも今のところ冥府に行くつもりはねえな」

冥府に、と言うことはクチナワは本来ならば既に死んだ存在なのか。

「じゃあ私が管理者になるまでいなよ。私の方がお父さんや折継より立派にこの町を管理できるってこと、クチナワの前でも証明してあげるから」

「お前が管理者になるまでって言うときまだ随分先の話だろ？ そんな先のことで保証できるか」

「そんなの分からないじゃない」

「お前は長生きしろよ。シノは管理者には早すぎた」

クチナワ 7

「早すぎた？ 一番住みやすくなったんじゃなかったのか？」

つい口に出してしまい、ユズリとクチナワの視線が揃って遊佐に向けられた。

クチナワはしばらく遊佐を見てから「ああ」と声を上げた。

「もしかして小僧はまだ知らないか？ 管理者は死んだ人間が冥府から受ける役職のことだ。もしかしてシノが此岸じゃ死んでるってことも知らなかったか？」

「いや、それは知っていた」

だがユズリと折継の遣り取りなどを見ていた限り、管理者という役目に就くのが死んだ者だけということは想像していなかった。シノが死んでからそういった役職に就いたと聞いてはいたが、死人限定などとは聞いていない。

「ユズリがすぐにでも自分が跡を継ぐようなことを言っていたから、誰でもなれるものなんだと思ってた」

そう答えてユズリを見ると、ユズリは気まずそうに顔を背けた。

「ユズリ」

クチナワは視線は火薬に落としたまま一段低い声でその名前を呼んだ。

「お前はあくまでも此岸での自分を第一優先にするって条件でシノからこの町での抜刀帯刀許可を得たんじゃなかったか？」

「……別に昼の世界を蔑ろにしてるわけじゃないし」

不貞腐れたようにユズリは答える。

「それに早死にしたいわけじゃないし。ただ折継に管理者の座を渡す気はないけど」

「折継な……ったく。近頃の餓鬼共は命を惜しむってことを知らねえな」

心底呆れたといった風にクチナワは言い、火薬を詰めた袋を紐で

縛った。

ユズリはあからさまに拗ねた顔をして俯いている。そんなユズリを見ずにクチナワは言った。

「必死に生きろよ。生きているなら」

「……わかってる」

「死んでから後悔しても遅いからな」

「……知ってる」

もうユズリは顔を上げることせず、唇を噛みしめてじっと地面を見ている。せっかく珍しく上機嫌だったのに、また機嫌を損ねてしまった……否、拗ねてしまったと言った方がしっくりくるか。

「ああ、それから」

そして続けられたクチナワの言葉。

クチナワ 8

「ついでに二人とも少し動くなよ」

ずっと火薬をまとめる作業に徹していたクチナワはその作業を一旦止め、手元に並んでいた商品らしい壺や瓶の中から陶製の小さな蓋つきの壺を取り、顔を上げることなくそのまま背後にその壺を投げ捨てた。それは彼の背後の塀を飛び越え消えていった。

刹那。

「ぎゃああああああつ！」

耳をつんざく悲鳴。それも複数。

「やめつ、ぎゃああ！ た、助けてく」

やがて悲鳴はぴたりと止んだ。

不気味なほど唐突に、恐ろしいほどの静寂が帰ってきた。

「もう動いていいぞ」

そしてクチナワは何事もなかったかのように再び作業に戻った。

「……今のは」

その遊佐の問いに答える者はいない。代わりに遠巻きにクチナワを窺っていた輩があからさまな怯えの視線を一斉にクチナワに向けたかと思えば足早に立ち去っていく。

これ以上ないくらい明確な回答だ。

「ユズリ。多分今の連中も無認可帯刀者だったかどうする？ 数は三人。全員が何ってたか……ああ、肥後守だったか？ みたいなものを持っている。狩るか？」

「……………行く」

ユズリは俯き加減に頷き、小走りに塀に沿っていった。その姿はすぐに闇に紛れてしまい見えなくなってしまう。

「相変わらず刀狩熱心な奴だな」

クチナワは袋に詰め終えた火薬の小袋を遊佐に手渡ししながら言った。

「やっぱりあいつは刀狩好きなのか」

ユズリの消えていった方を見ながら遊佐は呟く。

「まあいい小遣い稼ぎになるらしいからな。ところで小僧。黒銀二十だ」

「黒銀……俺はまだこの通貨はよくわからないんだ。悪いがここから勝手に取ってくれるか」

言いながら遊佐は財布ごとクチナワに渡した。中には両替商の元で昼の世界の物品と交換してもらったこの町の通貨がいくらか入っている。

クチナワ 9

クチナワは無言でそれを受け取り、数えるように一枚ずつ黒みがかった四角い銀を二枚取り出した。

「丁度だ。毎度あり。……ああ、ユズリも狩り終わったらしいな。すぐに帰ってくる」

「あんた、後ろも見えてたりするのか？　しかも塀の向こうまで見えたりとかも」

「当たり前だろ。背後を見るためにうなじに目があるんだろうが。目がいい奴は障害物があっても向こうをみることができる。そして俺は目はいいほうなんだよ」

さも当然のようにクチナワは言い切る。

やはり彼の常識と遊佐の常識というのも随分異なるものらしい。

「そう言えばお前らは目が正面にしかないんだっただな。不便じゃねえのか？」

「……いや。特に感じたことはない」

「ふん。そういうもんか」

クチナワはもう興味をなくしたように遊佐に財布を返して話題を変えた。

「しかしお前も大物だな」

何のことだと思い、遊佐が軽く眉をひそめるとクチナワは続けた。「ユズリの相手のことだよ。あいつは悪い奴じゃねえが扱いにくいだろ？」

「大物扱いしてもらえるほど、ユズリの相手は大変な作業なのか」
言われてみれば、確かにそうかもしれないと思わなくもないが、するとクチナワは初めて表情を弛めた。

「何しろ猪突猛進で負けず嫌いで気位が高いだろ？　シノが死んでしばらく町に出入り禁止になってそれが解かれたと思ったたらあなっただけ帰ってきたんだ。ここじゃ弱みを見せるのは危険だし、次の管

理者候補に名前が挙がつたんだから扱いにくいくらいでちょうどいいのかもしれないが。まあ俺達みたくガキの頃のあいつを知ってる奴らは随分驚いたもんだ」

「あんたもユズリとの付き合いは長いのか？」

「ああ。シノが初めてあいつをこの町に連れてきた時、確か満年齢で三歳になるとか言ってたな。人見知りで驚くとすぐ泣くが今に劣らず負けず嫌いのガキだった。あくまで子供らしいって範囲でだけだな。まあ年相応のガキだったと思うぜ。最初はいつもシノの後ろに隠れてるんだよ。慣れてくるとにこにこにこにこと馴れ馴れしく向こうから来るようになってくるんだが。ま、何にしても今からじやなかなか想像もつかないかもしれないねえが」

クチナワ 10

なかなかどころか、まったく想像がつかない。父親の後ろに隠れて驚くとすぐ泣く？

「それは人違いじゃないのか？」

大真面目に遊佐が言うと、クチナワは渋い顔をして薄く笑んだ。

「やっぱり想像つかねえか」

「あいつがファザコン気味なのは知ってるが、人見知りして驚くとすぐ泣いて、しかも笑いながら馴れ馴れしく寄ってくる様というのがどんなに脳を酷使しても想像できない」

あの万年仏頂面で成分の九割が怒で構成されているような女が。短気ですぐ抜刀して、なぜあそこまで自信にあふれているのかというくらい根拠不明の過剰な自信家が。

「本当にガキの頃の話だからな。あれでも親しくなった町の奴に笑顔で名前呼びながら走ってきたような時代があったんだよ」

笑顔で……走ってきた？

「やっぱり別人じゃないのか？ 双子の妹とか」

「あいつに兄弟はいねえよ。シノの子供はユズリ一人だ」

そう言うクチナワが嘘をついているようには見えないし、無駄な嘘をつくタイプにも見えないのだが、鵜呑みにするには日ごろのユズリはあまりにあれだ。

この町では随分常識を覆すような出来事に遭遇してきた。だが間違はなく一番困惑させられたのはクチナワの語る『幼い頃のユズリ』だ。

「まあその様子だとお前は随分ユズリに苦勞をかけられてるらしいが、扱いに慣れりや悪い奴じゃねえ。せいぜい仲良くしてやってくれよ」

「な、仲良く……？」

「俺も最初は可愛げのねえガキだと思っていたが、慣れてくりや何

だったか……何でもあいつの世界の何とかっつー甘いもんを他人にくれてやる行事があるらしいんだが、毎年律義に俺のところにも持つてくるようになったしな。俺は甘いものは食わねえから氣い遣つて、その何とかっつー甘いものに酒を入れて作つてくれたこともある」

「……甘いものを他人にやる行事？ それってバレンタインか？」
まさかとは思うが。ユズリがバレンタインに手作りチョコを渡す姿なんて想像もつかないが。

だがクチナワは「そっつーそんな行事だったか」と言つてひとり頷いていた。

「そっつーやシノの奴も似たような菓子をユズリからもらつてたくせに、何で俺がもらつとあんな殺意の籠つた顔で嫌がらせされてたんだ、俺は」

わからねえ、と言いながらクチナワは首をひねっていた。

クチナワ 11

つまり、そういうことだったのか。ユズリがクチナワにだけ妙に好意的だった理由。

（あいつも人並みに他人を好きになつたりするのか……）

人のことを言えた義理ではないがやはり意外だ。

遊佐が困惑しながらも思考を巡らせていると、一度は消えていった方から足音が聞こえてきた。

小刀のようなものをいくつか抱え、重いのかよろよろと揺れる人影。ユズリだ。

「ちよつとクチナワー。あんたもやりすぎだつて」

無数の小刀を強引に遊佐に持たせ、ユズリは微妙に青い顔でクチナワの前にしゃがんだ。

「大量でよかつたじゃねえか」

クチナワは淡々と答える。

それに対しユズリは背中を丸めて重苦しい息を吐いた。

「……どんな火薬だか何だかを使ったか知らないけど、連中ほぼ五体バラバラだったんだけど」

「殺^やられる前に殺れ、が俺の営業方針でな。まあここじゃ死なねえが」

とんでもない営業方針だ。そもそもそれは営業を前提の上に掲げるべき方針なのか大いに疑問だ。

「あーもう。そんなだから冥府にも目をつけられるのよ。折継じゃあるまいし、もう少し穏便に済ませてよ」

「穏便に済ませたらこつちが殺られるだろうが」

何でもないことのように言つてクチナワは煙管^{キセル}を口にくわえた。

「そりゃアナタ様が常日頃から他人の恨み買つようなことに首突っ込んでるからでしょ？ もう少し自重したほうが身のためよ？」

「性分で」

受け流すようにクチナワは答えた。手にした煙管からは遊佐も知る煙草とは違った不思議な香りのする薄緑色の煙が漂っている。

「煙草もやめてよ」

ユズリが抗議するとクチナワは少ししてから煙草盆に煙管を置いた。

「これはお前らの世界のやつと違って特に人体に害のない嗜好品なんだけどな」

クチナワ 12

「だからって人と話をする時に喫煙してないでよ。人と話す時は目を見て！ 常識じゃない」

「俺の世界の常識にはなかったが、まあ覚えておくとするか」

「そうそう。親しき仲にも礼儀ありってね」

ユズリは胸を張って言った。

仮にそれが遊佐に向けられた言葉だったとしたら、ユズリにだけは言われたくないが。

「ああ、わかったよ」

クチナワはそんな細かいことは受け流せるほど器が広いのか、それとも日ごろからユズリもクチナワに対してだけは礼儀とやらを守っているからなのか知らないが、口うるさい女家族から言われたかのようにあしらっていた。

「そうだ。遊佐はもう火薬受け取ったわけ？」

唐突に話を振られた。

「ああ、さつき」

「代金もちゃんと貰ったぜ」

クチナワが補足するように言う。

「これでお前らの用も済んだろ？ だったら早く表通りに戻れよ。」

いくら慣れてきたとは言っても、裏通りなんて真つ当な奴がいる場所じゃねえからな」

するとユズリは不満げに軽くクチナワは睨んだ。

「すぐ人を追い払おうとするんだから。クチナワも一人寂しく辛気臭い商売なんてしてたら寂しいと思ってせっかく遊びに来てあげてるのに」

「そりやお気遣いどうも。だからお気遣いできるような善人は早く帰った方がいいぜ？ ここはそこかしこに危なっかしい連中が跋扈してるからな。あんまりシノに心配かけるんじゃないぞ」

「クチナワはすーぐ悪ぶるんだから。何よ、何だかんだ言ってクチナワだってお人好しのくせに」

不満を全面に押し出してユズリは言う。

クチナワにとってはそんなもの、柳に風のようなが。

「俺はお人よしじゃねえつての。何度言わせるんだ餓鬼が。俺は冥府に行ったらその場で地獄落ちが決まってる奴だ。そんな奴がお人好しなわけねえだろ」

「……クチナワが生前を何したのかなんて知らないけど、私が管理者になったら冥府に口利きして情状酌量を願ってあげるわよ」

地獄の沙汰も金次第とは言っただけだが、地獄の沙汰もコネ次第か。生きても死んでも世知辛い世の中らしい。

そんなことをつらつらと考えていると、クチナワはどこか自嘲めいた風に言った。

クチナワ 13

「気持ちはあるがたく受け取っておくがな。俺に情状酌量の余地なんかどこにもねえよ。どんな賢人に弁護されようと、俺の地獄落ちは免れない。だから俺はまだこの町に留まって冥府から逃げてるんだろうが」

「クチナワ、一体何をしたわけ？」

どこか拗ねたような声音でユズリは尋ねた。

クチナワは顔の周りに浮かんだ鬼火を指先でつくように遊びながら、ユズリから視線を外した。

「……百篇地獄に落ちても足りないほどの非道の行いだよ」

その低い声から逃れるかのように、クチナワのそばから白い鬼火たちが飛び去っていった。

それ以上はユズリもクチナワも口を開くこともなく、ユズリは目を伏せながらも「また来るから」と言って踵を返した。

そして数歩、元来た道を戻りだした頃、後ろから声がかかった。

「ああ、言い忘れた。毎度のことで聞き飽きただろうがな。自分を見失うような色恋に溺れるなよ。お前はまだ若いからな。シノを泣かせるんじゃないぞ。そっちの小僧もな」

ユズリは歩みを止め、くると振り返って腹の底から叫んだ。

「わかってるわよ！　いつもいつも子供扱いすんなって言ってるでしょ！」

辺り一帯に響き渡るような大声の余韻が抜け切る前にユズリはすぐまた前に向き直り、足早にその場を立ち去った。

途中、遊佐は一度だけあの怪しい薬種問屋を振り返った。

前だけを見るその横顔はやはり厳しく目元は鋭い。だがその口元はわずかに笑っていた。……だからその表情がどこか泣きそうに見えたのは、きっと遊佐の気のせいなのだろう。

「遊佐！　何してるのよ、早く行くわよ」

「……わかつてる」

——地獄落ち。

今日初めて、生を終え、死を迎え地獄行きが決まっているらしい者に会った。

それはまさに蛇のような風体の男。

性格のねじ曲がった管理者の娘が悪人でないと評し、好意を示す男。

恐らくは違う世界から来た生死の中間にいる男。

少なくとも遊佐の目には百篇も地獄に落ちるような者には見えなかった彼は、一体何をしたのだろう。

この町に集う闇は底なしだ。

改めてそう思った。

クチナワ 13 (後書き)

クチナワ編はこれでおしまいになります。ここまでおつきあい下さった方、ありがとうございます。

次から新キャラをと思っていたのですが、そのキャラにたどり着く前にちよつとした閑話になりそうです。

そんな感じにノロノロ気まぐれに更新ですが、よろしければまたおつきあい下されば光栄です。

危険意識 1

裏通りからは案外すんなりと表通りに帰ることができた。

というのも、先ほどクチナワが遊佐には想像もつかないが大惨事を引き起こしたおかげで彼と行動を共にしていた遊佐とユズリにも近寄りたくないとはかりに周囲が勝手に道を空けてくれたからだ。

薄暗く細い道を一步抜ければ提灯と鬼火とで色鮮やかに照らされている、今となつては遊佐もよく見知つた極彩色の町だった。

「本当に裏通りつてのは別世界だったな」

ユズリに持たされた小刀のようなものを数振り抱え、遊佐はしみじみと口にした。

「だから普通は裏通りなんて行かないのよ。クチナワはあそこで商売している割に善人だからいいけど、他の連中なんてとんでもないもの」

「……お前、クチナワに対してはけっこう好意的だよな」

この話題については下手に突くべきではないと思いつつも、めずらしく遊佐の中に湧き起こった好奇心に負けてつい口にした。どんな反応を返されるかと内心戦々恐々としながらユズリを窺うと、意外にも彼女は明るい表情を浮かべていた。

「クチナワはいい奴だもの。私が小さい頃から相手してくれてたし、筋も通つてるし、この町で数少ない信頼のおける奴よ」

そう言つて強気にだが笑つたユズリは本当に、本当にめずらしく年相応の少女らしい表情だった。

好戦的かつ高慢が彼女の表情だと思つていたが、こういう顔もできるのかと内心かなり驚きながらも遊佐は黙つて頷いておいた。口は災いの門とは先人たちもうまく言つたものだ。

ところが、ふいにそんな珍事とも言つべき表情を浮かべていたユズリの顔が曇つた。

「でもどうせなら最後に行くべきだったかしら。……私はつい嫌な

ものを最後に残しちゃうのよね。本当は八卦院の後くらいに行った方が効率はよかったんだけど」

「そう言えば手紙はあと何通あるんだ？」

「一通よ。……その一通が問題なのよ」

大刀を握り締めてユズリは深く溜息を吐いた。

嫌そうな顔だ。何と言うか、嫌いな食べ物や授業を忌避する子供のような。

「……その一通の相手っていうのはどんな奴なんだ？」

一応聞いてみるとユズリは暗い表情で一言。

「最凶最悪」

危険意識 2

簡潔な言葉だ。だがそれだけでも十分これから会いに行かなければならない人物が面倒臭そうな相手だということだけはわかる。

さらにユズリはぽつりと続けた。

「名前を聞いただけで阿鼻叫喚」

それはクチナワじゃないのだろうか。

「笑う凶器」

それは折継じゃないのか。

「怒らせると三千倍返し」

そしてそれはお前だろう。

「……恐ろしい奴よ」

遊佐の内なる言葉に気付くはずもなく、ユズリは再び重い溜息を吐いた。

思えば彼女がこうもあからさまに恐怖を表に出すのは珍しい。

何だかんだ自尊心が高いらしいユズリはどんな相手にも怯むことなく、高慢ですらある。そんな彼女の口から恐ろしいとまで言わせる相手とは一体どんな人物なのか。

平気で腕を落とす女装男とは憎まれ口を叩き合い、無言で身体欠損させる地獄落ち決定の薬種問屋には懐く。

そんなユズリが恐れる相手など、想像するだに恐ろしい。

「あー……それでその恐ろしい奴ってのはどこにいるんだ？ 表通りに戻ってきたってことは裏通りにはいないってことか？」

「多分ね。あいつは気分次第だから何とも言えないけど、多分あそこだと思う」

「あそこ？」

「あいつのお気に入りの場所があつてね。別に立ち入り禁止区域でもないのに常に貸切状態になってるのよ」
「って言う」と

「あいつと顔を合わせたら地獄に百度落ちるより酷い目に遭わされるってんで誰も近寄らないの。たまに命知らずがいるけど」

「はあ」

曖昧な返事を口にする、前方が妙にざわめき始めた。

「何だ？」

目を凝らしてみると、先に行く人々が逃げるように両脇に逸れて人に溢れていたはずの道の中心を開けている。それは何かを忌避するかのように道を割って行き、時には耳をつんざくような悲鳴が聞こえてくる。

その開かれた道を歩いてくる人影がひとつと喧しい声、そして何か重いものを引きずるような音。

危険意識 3

「畜生が！ てめえにや血も涙もねえのか！」

必死になって叫んでいるのはしゃがれた声。

「お前に言われたくないって。何でこんな状態になってもそうもペラペラしゃべれるのか不思議だよなあ。解剖して構造を調べてみたいもんだ」

しゃがれた声を逆撫でようとしているのではないかというくらいに呑気な声。

自然に割れる人垣は遊佐たちのすぐそばまでやってきて、やがて視界にはつきりとその人影が映った。

「あ……あ？」

その人影の奇怪な様子につい顔をしかめてしまう。

「お。そこにいるのはユズリに遊佐じゃん。さっきぶりー」

そう呑気すぎる声を上げたのは町には不似合いな洋装の若い男。つい先ほど会ったばかりの危険人物・折継だった。

しかも彼の手にはほんのつい先ほど別れた時のように彼を危険人物たらしめる脇差だけでなかった。その手で筋肉質な四肢のついた胴体を着物ごと掴み地面を引きずっている。

しかももう片方の手には首。首だ。

どう形容しようと生首としか言いようのない物体が折継の右手によって掴まれている。

子供向け絵本に出てくるような敵つい赤ら顔に大きな口からは牙が覗く。あろうことかその鬼の首は自分をぶら下げて歩く折継に対し、大きく口を開けて文句を述べていた。

「てめえ！ 人の話を聞けっ、おいっ！ この糞餓鬼がっ」

「何だよ二人とも。師匠のお使いは終わったのか？」

だが折継は鬼の首の言葉などまるで聞こえないかのように遊佐たちには話しかけてきた。

笑顔の優男と喋る鬼の首と、そして引きずられる鬼の首から下の体……何とも形容し難い光景だ。ある意味とても恐ろしい光景だが。「……あんた、今度は何してるの？」

ユズリが眉間にたつぷりと皺を寄せて口を開いた。怒りというより困惑を滲ませた表情で。

しかし対する折継は平和そのものの笑顔だ。

「ん？ ああ、さっきの無認可オヤジいたろ？ あいつを番所に届けたら、この鬼野郎を冥府に届けなきゃいけないのに暴れて言うことかかないって番所の奴らが困ってたから、じゃあ俺が連れてつくわってな流れで」

「それで何で首と胴体が離れてるのよ。周りが怯えてるじゃない。やめてよ、猟奇事件起こすのは。あんたが何かするたびに町の治安が悪くなるわ。前の首狩り事件といい、逆さ磔^{はりつけ}事件といい」

呆れがちなユズリの口から随分物騒な単語が飛び出した。

そうか、やはり折継というのはそういった事の渦中にいるタイプの人間なのか。悪い人間ではなさそうだがこれ以上お近づきにならないほうが賢明だろう。間違いない。

そんな遊佐の心中など知るよしもなく、折継はけろりとした調子で答える。

「事件起こしたのは俺じゃないだろうが。俺はむしろそういう猟奇事件を解決した英雄として扱われるべき存在だろ？ あとこいつは元から首から上と胴体を切り離して動ける奴なんだから別にいいじゃん。どっちかの体を捕まえときゃ逃げることもできないしさ」

折継は視線を手にした鬼の首に向けるが、鬼は目を逸らして沈黙している。もう答えることも嫌だということか。

危険意識 4

「……本当にここには色んな奴がいるな。理解の範疇を超える」

遊佐が思ったままに呟くと、折継は笑いながら続けた。

「だろー？ もう面白いつたらないよな。ガキの頃なんてタダでお化け屋敷に入った気分ですっげー楽しかったし。惜しむらくは違う世界の奴は此岸に持ち帰れないってことだよな。こいつなんて節分の鬼役にぴったりだったのに」

けられりと楽しげに笑いながら折継は鬼の首を振りまわした。しやがれた声が悲鳴を上げたがまったく気にしていない。もしかすると聞こえてすらいないのかもしれないが。

折継はにいつと笑い遊佐の視線の高さまで鬼の首を持ち上げた。

「だけどこいつなんてまだいい方だ。何せ俺も遊佐もユズリもこいつを視認できる。こいつがなぜこうもやかましく喚いているか、それだって理解できるよな？」

「そりゃああんたがそうして無体な扱いをしてるからだだろう？」

他にどんな理由があると言うのか。

「そう。まあ他には冥府に送られることなんかもこいつの不満の理由のひとつなんだろうが、まあその辺までは理解できるだろ？ 自分が気に入らないことをされたからこいつは不満なんだ。そしてそれを言葉にし、態度に表しアピールしている」

「まあそうだな」

何を当たり前のことを言っているのか、という顔を見ると折継は先ほどまでとは違う薄い笑みを浮かべて言った。

「ここで本当に恐ろしいものの一つは理解の外にある存在。どう足掻いてもその思考を理解できないような、まるで違うものの考え方をする奴だ。そういう連中は厄介だ。この町は特殊な場所だから、あらゆる世界のあらゆる言語による意思疎通が可能っていう場所なんだが、言葉が通じないものほど怖いものってのはない。同じ言葉

を話しているはずなのに、相手の意思が理解できない奴つてのはな」
折継の言葉は分かるようでいて分かりづらい。

とりあえずこの町では自動翻訳されるから言葉が通じない相手というはいない。だが、本当の意味で言葉の通じない相手はいるという事。

「此岸でだつてそうだろ？　あまりに自分とは違う考え方すぎて理解し合うことができないとかそういう話」

「ああ。あるな」

「この町はこういう危なっかしい町だからさ、危なっかしい奴が多いんだよ。それで思考回路が全然違う奴なんて怖いぜ？　俺からすりゃとんでもない悪逆非道の行いが、そいつにとっては最も正しいことだったりとかさ」

「話し合いは無駄そうだな」

「んーまあそれもそうなんだけど、何て言うんだろー。けつこうやバイ、イっちゃってる奴つてのは俺も何度か会ったことがあるんだけど、そういう奴らはこう本能的に怖いって感じちまうんだよ。やりにくいったらないぞ？　恐怖は御し難いからな」

「お前にも怖い相手なんているのか……」

絶対怖いものなんてなさそうなのに。まさに怖いもの知らずという感じがありありとするのに。

だが折継は笑みを崩すことなく答える。

「そりゃあな。多くはないけど一応」

「あんたにそんな人間らしい感情あつたんだ」

ユズリが呆れたように折継を見る。

その視線を受け、折継はくつくつと笑った。

「そりゃあ俺も人間だし？　それにユズリですら泣いて逃げ出す相手だっているんだ。そんな相手は俺だつて怖い」

「泣いて……」

そこまで言いかけて、途端ユズリの顔に焦りが生じる。

「っ別に泣いて逃げたりなんてしてないわよ！　ただあいつはちょ

「と理解不能だっただけで……」

危険意識 5

「そうそう。理解不能な相手は怖い。ユズリに理解できないなら俺にはもつとできないさ。あいつは」

「あいつ？」

二人の恐怖の対象と『あいつ』とは同一人物なのか。

折継はおどけるように言う。

「あいつは怖いぞー？俺もここじゃ知り合いは多い方だが、あいつに全く恐怖心を持たないのは師匠くらいのもんさ。あとは……クチナワあたりもだな。お前ら代表者に会いに行ってたんだっけ？

あいつにも会った？」

「つい今しがた」

遊佐より先にユズリが答えた。

「その小さい刃物はクチナワのところで狩りたてはやはやよ」

そう言っただけで遊佐が抱える小刀を指差す。

「クチナワのところであいつまた危なそうな奴らに狙われてたのか？」

折継は小刀の束を覗きこんでユズリを見た。

「みたい。クチナワも敵が多いからね」

ユズリは肩を竦めて答えた。

「代表者なんて皆そんなもんだろ。八卦院みたいななんて例外中の例外。大概は町の悪名高い連中で構成されてるんだし。あ、俺みたいな善人も例外か」

「よく言うわよ。どこの善人が喚く鬼の首ぶら下げて歩いてるのよ」「それはほら、ここに」

あくまで笑顔の折継からユズリは顔を背け、うんざりとした調子で息を吐いた。

「あーもういいわ。じゃあ自称善人はとつとその鬼届けて来なさいよ。あ、ついでだからこの小刀も番所に持って行っておいでくれ

ない？ どうせまた後で番所に戻るんでしょ？」

「俺こんなに重い荷物両手に抱えてるんだけど」

そう言っつて折継は鬼の胴体と鬼の首をユズリに示す。

だがユズリはそんなこと意にも介さず言っつた。

「だったらその鬼の胴体に持たせておけばいいじゃない」

鬼の首がぎょっとした顔でユズリの顔を見上げた。

「ああ、その手があつたか」

折継は晴れやかな表情で遊佐に向き直つた。

危険意識 6

「それじゃあ遊佐、その小刀こいつに渡してくれよ。ちゃんと届けてやるから」

「……いいのか？」

折継ではなく、彼に握られた鬼の首を見て遊佐は聞く。鬼の首は最早これ以上言葉を発することを諦めたかのように黙りこくつてしまっている。

いくら捕まった相手と提案してきた相手が悪かったとは言え、さすがに哀れだ。

そんなことを考えているうち、「貸しなさいよ」と言つてユズリが遊佐の手から数振りの小刀を奪い、強引に鬼の手に握らせた。

「さすが鬼ね。手が大きいからこれくらいの小刀ならいくらでも持たせられそうだわ」

鬼の首を見下ろすようにユズリが言う。

「労働力としてはそこそこ使えるだろうな」

どこか寒気を誘うような笑顔で折継も言う。

二人に見下ろされた鬼の顔に露骨なまでに怯えが生じた。

気の毒に。蛇に睨まれた蛙どころか、鬼が鬼以上の何かに睨まれている。

「ほんじゃ、俺そろそろ行くから」

鬼の首を挨拶代わりに持ち上げて折継は先へと歩を進めた。

「あ、待った。ねえ、今日はあいついた？」

「あいつ？」

ユズリの言葉に折継は顔だけで振り返りながら聞き返す。

「つい今しがたまで話題にしていた『あいつ』よ」

その言葉に折継の笑顔が凍りついた気がした。

これもまた珍事だ。この得体の知れない恐怖の女装男でもこんなことがあるのか。

「まさかユズリ……お前が手紙を届ける相手って六条も含むのか？」
どこか堅い調子の折継の問いにユズリは神妙な顔をして頷いた。
なるほど。彼女らの言う『あいつ』の名前は六条と言っらしい。
その横で折継の顔が引きつった。

「マジかよ……何つー過酷な……。そうか、代表者全員強制参加って言われたんだもん。うっわー今度の集会あいつ来るのかよ……さばろうかな」

「強制参加でしょ？　て言うかあんたはいいわよ。顔を合わせたって直接関わるとは限らないじゃない……こっちなんか直接手紙を手渡さなきゃいけないのよ……否応なく関わらなきゃいけないのよ」

ユズリと折継は揃って頭垂れ、重たい息を吐いた。

この二人がここまであからさまに忌避すべき相手とは一体どんな奴なのか。少しは興味があつたが、命あつての物種。触らぬ神に祟りなし。先人が遺した有難い言葉に従うなら遊佐もそんな相手とは関わりたくない。

「顔を合わせといて挨拶ひとつしなかつたらなおさら怖いだろ……」
「そりやそうだけど……それでも無難に社交辞令で挨拶しておけばいいだけじゃない。明らかにそっちのほうが楽よ」

鬱々とした空気をまきちらしながら二人は言い合う。

「楽なもんかよ……あいつは俺をいたぶって楽しんでるんだよ。社交辞令だけで済むもんか。絶対何かしら仕掛けてくるに決まってる」
「いくらあんたよりマシとは言え、私だってあいつと直接会つてなんて何としても避けたいのに。お父さんのバカ！」

嫌だ嫌だと言いながら二人はどんどん暗くなっていく。

その光景はやはり町から見ても稀なのか、気付けば遠巻きに行き交う人々がこちらを窺っていた。

「あ……その、そいつはそんなにヤバイ奴なのか？」

遠慮がちな遊佐の言葉にユズリと折継が同時に顔を上げ、頷いた。
「俺らはガキの頃からここに通っていたから、あいつには散々トラウマを形成させられたんだよ」

「……そもそも存在自体が恐怖よ、あいつは。子供の頃からの条件反射であいつを見ただけで鳥肌が立ちそうになるんだから」

それは随分なことだ。二人にトラウマを植え付けるほどのなかから、やはり相当な人物なのだろう。だが管理者の性格を思えば、その代表者に手紙を届けなければ戻っても何度でもまた放り出されるに決まっている。

実の娘であるユズリはそれを理解しているからこそ、ここでこうして二の足を踏み続けているのだろう。だがいつまでもこうしてい

ても埒が明かない。

「とにかく何にしても俺たちはそいつのところに行かなきゃならないんだろ？ それだったら諦めて早く行った方が楽になるんじゃないか？」

「わかってるわよ……わかってはいるのよ！ けどさあ……」

「遊佐だってそんな余裕がましてられるのも今のうちだぜ？ あいつをちよつと知ったらもうそんなこと言えないからな」

そう言つて折継はまた溜息を吐いた。

「まあいいか。俺はとりあえず集会の日までは顔を合わせず済むんだし……とりあえずお前らががんばれよー」

まだ暗い顔をしながらも折継は顔を上げて言った。

危険意識 8

「それはドウモ。しかしお前らにそんな顔をさせる六条って言うのは一体どんな……」

遊佐が言い終わる前に辺りから複数の悲鳴が上がった。

遠巻きにこちらを見ていた人々は怯えるような顔でこちらを見たかと思えば、こそこそとその場を立ち去っていく。

「六条って……」

「やめろ！ その名前を聞くだけで古傷が……」

「だ、駄目だ……六条が、あいつが来るううう！」

そんな言葉を残しながら、気付けばほとんどの人々がその場から消え失せていた。

遊佐たちは通りの真ん中にぽつんと取り残された。

ユズリと折継だけでなく、他の住人たちもここまで恐れさせるとは六条とやらは本当にどんな猛者なのか。

「遊佐」

折継が後ろから重い調子で言う。

「あいつの名前はできるだけ人前で出してやるな。……一般人には刺激が強すぎるから」

見れば折継の手に握られた鬼の首と胴体もかたかたと小刻みに震えている。

「そうよ。あいつの名前は表通りでもほとんどが裸足で逃げ出すほどの効力を持っているんだから」

ユズリは深く息を吐いて顔を上げた。

「とは言え、確かに逃げっぱなしなのも性に合わないのも確かなんだけどね」

僅かに青ざめた顔でユズリは町の中心を、炎の揺れる十二階建ての塔を見た。

「で、折継。さっき聞こうと思ったんだけど、今日もあいつは塔に

いた？」

折継は軽く首を傾げた。

「塔から逃げるように出てきた奴を何人か見かけたから、多分そうだろうな」

「そりゃあ間違いないわね」

「まあ行けばすぐわかるだろ。いるかないかくらい」

「まあね」

二人は同時に今日何度目とも知れぬ溜息を吐いた。

「じゃ、次の集会でせいぜいあいつの逆鱗に触れないようにね」

「ああ。そのためにもあいつの機嫌を損ねるような真似しないでくれよ」

折継は鬼を引きずりながら遊佐たちの来た方向へと歩き出し、ユズリもまた足取りは重いながらも前へと歩き出した。

「ほら遊佐。あんたも早く来てよ」

振り返ったユズリの顔には常のような覇気はない。重症だ。

そして並んで歩き出した遊佐の顔は見ずにユズリは言った。

「お願いだからあんたも六条を怒らすようなことしないでよ？」

「……努力はする」

これだけ恐れられるほどの相手をわざわざ好き好んで敵に回そうと思うほど遊佐は物好きではない。むしろ既にユズリの後について行くことを辞退した方がいいのではと思うくらいだ。

それとなくその旨を伝えてみると、ユズリが鬼のような形相で「あんた一人だけ逃げる気!？」と首根っこを掴まれてしまったのでやはり一緒に行くしかなかった。

六条 1

折継と別れて存外すぐに目的地、町を中心である十二階建ての塔の下に着いた。

中心地にあるだけあって塔を中心に十字に伸びた大通りは特に賑やかだ。あちこちに店があり、物売りが声を上げていたり、多種多様な人と言っているのか不明瞭な人々が行き交う。

「ここにそいつがいるのか？」

遊佐は予想より高い十二階建ての塔を見上げながら訊いた。

ユズリは唇を引き結んだまま頷く。その左手には太刀が握り締められている所を見ると緊張しているのだろう。

十二階建ての塔は赤茶の煉瓦造りで西洋建築風だ。八角柱状になつており、各階に窓とバルコニーが設置されている。そして塔の屋上には常に煌々と炎が灯っている。これは見る者によって色が違って見えるらしいということは最近ユズリから聞いた。

あの炎は遊佐達が帰るべき世界、此岸でのその時の空の色を表しているのだという。此岸でも場所による時差は存在するし、もちろん遊佐からすれば全くの異世界であるとの世界では時間の流れすら違うのだろう。

今、遊佐の目には炎はほとんど黒に近い藍色に見える。此岸では真夜中なのだろう。昼間この常夜の町に訪れたことはないからわからないが、昼間はやはり鮮やかな空色の炎が見えるのだろうか。

そんなことをつらつらと考えていると隣で重苦しい溜息が吐かれた。言うまでもなくユズリだ。

「この十二階のバルコニーがあいつのお気に入りなのよ」

「十二階……」

ということは最上階のバルコニーか。

見上げてみても地上からではバルコニーそのものが邪魔になってしまい、十二階に人影があるかまでは見えない。

「本当にいるのか？」

「……多分いると思うわよ。折継の奴の証言を信用するなら少なくともさつきまではいたはずよ」

そしてユズリはまた溜息を吐いた。

遊佐とユズリの付き合いは決して長いものではないが、ここまで気乗りしないユズリは初めてだ。傲岸不遜を絵に描いたような彼女の精神を会う前から疲弊させることのできる相手。それがこの上にいるのか。

「十二階……って言うとなんか高くはないよな」

「まあね。高層ビル群に慣れちゃった私たちからすれば特別高くはないけど、最上階のバルコニーはそこそこに見晴らしがいいわよ。だからあいつはそこがお気に入りなの」

「へえ。高いところが好きなのか？」

「本人曰く景色がいいとのことよ。まあ何とかと煙は高いところが好きって言うから……」

ユズリが暗い表情で皮肉を口にした時。

「ぎゃあああああああ！」

それは悲鳴だ。声の感じからするに野太い男の。

今日何度目とも知れない悲鳴と共に、遊佐たちから少し離れた場所に勢いよく何かが落ちてきた。その衝撃音に周囲を行き交う人々も足を止めた。

そこには身の丈三メートルはありそうな筋骨隆々の男が白目を剥いて仰向けに倒れていた。裸の上半身には横一文字に大きな傷がありそこから相当な出血をしているが、かろうじて指先が動いているから生きてはいるらしい。否、この町に死はないそうだから元から死ぬこともないのだろうが。

「……やっぱりいるわ」

ぼそりと低い声でユズリが呟いた。

それから立ち止っていた周囲の人々に向かって声を張り上げた。

「誰か！ 医家を呼んできて！」

ユズリの声に立ち止り茫然としていた数人が弾かれたように駆けて行った。それと同時に立ち止っていた人々もほとんどが散った。

「おい、番所の奴を呼んできた方がいいんじゃないか？」

「だ、だよなあ」

ユズリの後ろでそんな会話を交わしていた男たちにユズリは振り返らぬままぴしゃりと言いつつ切った。

「必要ないわ」

男たちは揃って困惑の表情を浮かべた。

「いやでも、事故でも何でも一応は……」

「事故でも自殺未遂でもないわよ。ただ単に十二階のバルコニーから突き落とされただけだから」

「単につて……そっちのがまずいじゃねえか！ 落とした奴は番所に連れて行って管理者に任せたほうが」

男の一人が慌てたように叫んだ。

「どうやら彼はユズリのことは知らないらしい。知っていたらこんな口の聞き方はできないだろう、多分。」

六条 2

ユズリは眉を吊り上げて男に振り返った。

「どうせ正当防衛になるからいらないつつてんのよ」

低い低い声だ。

「こいつを落としたのは代表者よ。飛びきり口達者で悪知恵の働く悪辣な」

不機嫌を全面に押し出すユズリに男たちが怖気づいたように一歩後ろに退いた。

「この程度であいつをどうこうできるならあんな奴、とつくの昔に冥府に送られてるわよ。あの六条が、この町の数少ない法を熟知し抜け道という抜け道を網羅しているあいつがそんな間の抜けた真似するわけないでしょ」

「え、六……」

「六条!？」

男たちだけでなく残った人々も表情を凍りつかせた。

「ここににいるのか!? あの六条が!？」

「う、嘘だろ……何でこんな町のと真ん中に!？」

男たちは青ざめた顔を塔に向けたかと思えば、顔を見合わせてあつという間に走り去った。残った人々も同様だ。己に火の粉がかかる前に立ち去つたらしい。

「ふん、ここが六条のお気に入りだつてことも知らずに今の今までよくやってこれたわよね。随分悪運の強い連中だわ」

ユズリが不機嫌に呟くと、横目で落ちてきた大男を見てそのまま観音開きの扉の前に進んでいった。

「何だ、この落ちてきた奴はいいのか？」

「どうせすぐ医家が来るわよ」

右側の扉に手を掛けながらユズリは答える。

「全く最悪よね。こいつのせいであいつの機嫌が悪くなってなきや

いいけど」

最後に恨みがましい視線をいまだ起き上がれずにいる男に向け、ユズリは開けた右扉から塔の内部へと入っていった。そして遊佐に振り返る。

「早く来なさいよ」

これ以上彼女の機嫌を損ねないよう、遊佐も足早に彼女の後に従い十二階建ての塔の内部へと足を踏み入れた。

重い音を立てて扉が閉じて外界と塔内部とを隔てると、外の喧騒がうそのように静かになった。

天井からいくつかランプが吊るされていて、中は思いのほか明るい。

石畳の床、煉瓦の壁。そして壁に沿うように伸びた階段。

特に何があるというわけではない。装飾品も調度品も何もない殺風景な場所だ。

「一階は特に何もないわよ」

周囲を見回してた遊佐にユズリはつまらなそうに言う。

「いくつかの階は色々と使われてたりするけど、一階は空き部屋。

何もないの」

「色々？」

「書庫になってたり、住んでいる奴がいたり」

「住んでる奴がいるのか？」

てつきり公共物だと思っていたが違うのか。

「基本的に塔の管理は町の管理者がやるから、その時々 of 管理者の方針次第。今はうちのお父さんが七階を自室代わりにして、他の階は賃貸ししてる」

「賃貸し……」

あの管理者も、人の好きそうな顔をして抜け目ないことだ。

「ああ、じゃあもしかして六条って奴も十二階を貸し切ってるのか？」

いつもそこにいるとの話だし、さっき落ちてきた男も十二階から

突き落とされたと言っていたし、不法侵入でもして居住者の怒りにも触れたのかもしれない。

だがユズリは呆れ顔で遊佐を見た。

「あいつはそんなことしないわよ。賃貸ししてるって言ったってバカみたいな値段だしね。一応町一番の景観が楽しめるってことで一般開放されてるし」

「なら何でさっきの男は突き落とされたりしたんだ？」

「六条の機嫌を損ねたんでしょ。名を上げようとして町の名のある奴を狙う物好きも時々いるし。それとも六条の存在を知らずに十二階まで行ってあいつの視界に入っちゃって逆鱗に触れたとか……」

「ちよつと待て。視界に入っただけで逆鱗に触れたりするのかわ？」

今まで会ってきた代表者というのも確かに危険人物だったが、いくらなんでも視界に入っただけで逆鱗に触れるほど危険な奴はいなかったように思う。あくまで思うだけなので実際はわからないが。

そしてユズリは事もなげに答えた。

「運が悪いとね」

「運任せか」

六条 3

「本人に言わせたら何か機嫌を損ねる法則でもあるのかもしれないけど、私は知らないわよ。あいつの考えてることなんてお父さん以上にわかんないもの」

そう言えばさつきも折継とそんなことを言っていたか。

「あー本当に機嫌が悪くないといいんだけど」

溜息を吐くと、ユズリは迷いなく階段へと歩いて行くと一段目を前に止まった。

そして一言。

「十二階、二人」

そう言つてユズリは階段を昇り始めた。

遊佐はその様子を見て内心首を傾げた。ユズリは短気で乱暴で傍若無人だが比較的常識の範囲内で生きているのだと思つたが、一体今のは何なのだろう。十二階まで行くからお前も早く昇れと暗に遊佐に言つたのだろうか。それともどこかに記録媒体があつて十二階まで二人昇ると知らせたのか、それともこの町特有の儀礼か、それとも……。

「ちよつと遊佐。ぼけつとしてないで早く来なさいよ。何突つ立つてんのよ」

気付けばユズリは五段ほど昇つたところから不機嫌な顔で遊佐を見下ろしていた。

「……いや、今の一体何かと」

「はあ？」

ユズリの眉間にしわが寄る。

「『十二階、二人』つて言つたろ？ あれは何かと」

下手にごまかして余計に機嫌を損ねるよりはいいだろうと素直に訊いてみると、ユズリは面倒臭そうな顔をしながらも一応説明してくれた。

「この階段は昇る前に、何階まで何人って言わないと延々と昇り続けなきゃいけないのよ。私とあんたで二人、十二階まで。そういう意味」

「階段にエレベーターガールが機能としてついているようなものか」「エレベーターガールって……まあ確かにそんな感じね」

理解したところで早く昇ってくれと急かされ、遊佐も階段に足を掛けた。

金属製の階段をユズリに続いて昇っていく。不思議と天井も二階に差し掛かった階段部分も見えるのに、いくら歩いてもそこまで辿りつけない。

カンカンカンと硬質な足音だけが延々と殺風景な一階に響き続けるだけだ。この気分をたとえるなら下りエスカレーターを昇っている感じだ。傍から見たら相当まぬけな光景じゃないのだろうか。

それから五分ほどそのまぬけな光景を生みだし続け、ようやくユズリが二階に差し掛かる部分へと一歩踏み出した。

「エレベーターくらい設置してほしいわよね」

そんなことを言いながら階段を昇っていく。色々聞きたいことはあるが、やはり階数ごとに歩く時間は違うのだろうか。一応最上階を目指したわけだから他の階へ行くよりも時間はかかるのかもしれない。違つかもしれないが、今日のこの用事を終えてしまえばしばらくはここへ来る用事もないだろうしわざわざ聞くまでもないだろう。

そしてようやく遊佐も本来なら一階の天井でしかないはずの一部をくり抜いて階段を通した場所を越え一階天井の裏、二階の床へと足をつくことができた。ところが一足先に昇り終えたユズリは息を吐いてこう言った。

「さあ着いたわよ、十二階！」

「……ここは二階だろう」

すかさず言った遊佐にユズリは鬱陶しそうな顔を向けてくる。

「何言ってるの？ 十二階、二人って言ったんだからここはもう十

「二階よ」

「だってさっきまでずっと一階の階段を」

「だーから！ 最初に何階に何人って言ったでしょ？ あそこで二階って言えば一階から直行で二階。五階って言ったら五階まで昇れるようになるのよ、あの階段は」

「じゃあ十二階って言ったから一階の上が十二階になったと？」

「どうもわかりにくいが。」

「そうそう。空間がねじれてるとか言えはいいかしら。そういう感じなの、この塔は。どう見ても二階まで続いてたのに、階段を昇ってるうちにいつの間にか十二階まで直行になっているわけ。理屈はさっぱりわからないんだけど、そういうものって思うしかないわよ。でないとストレスたまるから」

説明にも疲れたと言わんばかりにユズリは壁に寄り掛かった。

六条 4

十二階。一階と同様殺風景な部屋だが、天井から吊るされたランプの他に窓があるためぼんやりと外から光が取り込める。夜だけの町とはいっても賑やかな町の中心地にはそこそこに明かりがあるからだろう。それなりに明るい。

八角柱状だった外観と変わらず室内はやはり正八角形。うち七辺の壁には硝子の嵌められたフランス窓に似た形のモダンな雰囲気窓が。そして残る一辺、一階では出入り口の扉があつた場所には硝子の扉があつた。

「ああ、そこがバルコニーに続く扉」

ユズリは太刀を握り直し、表情を強張らせた。

「この向こうにアイツがいるはずよ」

常闇の町では透明な硝子扉は光が反射して鏡のようになっていた。だから外の様子を窺うことはできず、ユズリの強張った表情と遊佐の能面のような表情しか見えない。

「……行くのか？ 何なら運が悪くて会えなかつたって管理者に言つたらどうだ？」

隣に立つてユズリを横目で見ると、ユズリは大きく深呼吸してから遊佐を見上げた。

「行くに決まつてるでしょ！ ここで帰つたりしたら、お父さんのことだもの！ 折継あたりに話を聞いて逃げ出したって判断を下されること間違いなしよ！ 私はそんな腰ぬけじゃないわ！」

己を鼓舞するように怒鳴ってユズリは先へ進み始めた。本人がそう言うのだから遊佐としては従うほかない。黙って彼女の後に続く。硝子の扉には金属のドアノブがついていた。ユズリがそれを捻りながら扉を開けば、涼しい風が室内に吹き込んできた。そしてユズリと共に屋内から石造りのテラスへ出ると真つ暗な空の下、遠く遠くまで無数の色とりどりの光が転々と広がっている。遠くへ行けば

行くほど光は少なくなってくるが、少なくともここからでは光が途切れる場所は見えない。この町は一体どこまで広がっているのだろうと今更ながらに考えてみる。

賑やかな町の音がずっと下から聞こえてくる。遊佐の目の前にはまっすぐ大通りが一本伸びている。あれがこの塔を中心にして伸びる十字路だろう。

「十二階くらいって思ったけど意外にいい眺めだな」

「この町一番の眺めですよ。お気に召して？」

遊佐の呟きに答えるように柔らかな声がした。

反射的に声のした方に振り返ると、テラスの端から細身の女が一人歩いてきた。

肩に届かない程度の長さで切り揃えられた黒髪。白い襟に臙脂色のスカーフ。紺の上着と、ウエストをベルトで留めた膝下丈のプリーツスカート。古式ゆかしい女学生のような風体の女、否、その服装を思えば少女とすら言うてもいい年齢なのかもしれない。落ち着いた雰囲気と大人びた表情からとても十代には見えないが、白い肌に整った顔立ちをした、いかにも深窓の令嬢といった雰囲気の女だ。女は切れ長の目を細め、小さな唇を開いた。

「素敵な眺めでしょう？ わたくしの一番のお気に入りの場所ですよ」

柔らかな笑みと鈴を転がすような声は遊佐に問いかけ、それからその隣で視線を止めた。

そこにいるのは先ほどから硬直しきっているユズリだ。

「貴女もそう思いませんか？ ユズリさん」

彼女の問いかけにユズリはびくりと肩を震わせ、ぎこちなく口を開く。

「そ、そう、ね」

どもりながら答えたユズリは無理やり作ったような笑顔だ。心なしか青ざめている。

「……知り合いか？」

「ええ。長いお付き合いになりますわ」

ユズリの代わりに答えたのは女だった。

「ユズリさんとはシノさんが御存命だった頃からのお付き合いになりますの。ユズリさんがお小さい頃のことなども存じておりますわ。お聞きになりましたかったらいつでも聞いて下さいましね？ 遊佐さん」

「俺のこと知って？」

女はにこりと笑う。

「存じ上げております。先日ユズリさんと共に冥府からの逃亡者を狩られたという鉄砲打ちの遊佐さんでしょう？ 随分お噂になっていますわ。刀狩においては折継さんにも劣らない腕前のユズ리さんと共闘なさったということで」

「はあ……」

そう言えば折継あたりもそんなことを言っていた気がするが、まさか本当に噂になっていたとは。

それにしても本当に戦前の女学生のような女だ。丁寧な言葉遣いといい、雰囲気といい。ユズリも少しは見習ってもいいだろうに。今も隣で顔を背けて太刀を握り締めているし、もう少し彼女のようになつてくれれば遊佐としても今より付き合いやすくなって助かるのだが。

「あらいけない。失礼致しました。わたくしつたらまだ名乗っていませんでしたわね」

女は口元に手を当てて申し訳なさそうに言う。

「遊佐さん、はわたくしのことはご存じないようですわね？」

「え、ああ、はい」

丁寧な言葉につられ、遊佐まで敬語を使ってしまう。それが気に入ったのか、女は嬉しそうに顔をほころばせた。

「ユズリさんも意地悪ですわね。一緒にいらしたのなら遊佐さんにわたくしのことを紹介して下さいてもよろしいのに」

「いや、その、あの……」

どもっている。視線が泳いでいる。珍しい反応だ。

「まあよろしいわ。わたくしもたまには自己紹介をしたいですもの。自分から名乗るなど一体いつ以来かしら？　では改めまして。お初にお目にかかります。わたくし、この町での名を六条と申す者です。どうぞよろしくお見知りおき下さいませ」

玲瓏な声が花のような笑顔と共にそう言った。

六条 5

六条——それはユズリと折継もが恐れる豪傑の名のはず。まさかこんな女学生のような相手を捕まえてあの二人が震えあがるなんてそんなことがあるわけが。

ちらりとユズリに視線を送ると、彼女は一步退くように顔を背けていた。いやまさかそんなわけが。

「ところでユズリさん。今日はどうかなさったの？ 貴女からわたしを訪ねて来て下さるなんて嬉しいですわ」

「あ……あの、お父さんが、これ、これを渡すようにって」

そしてユズリは震える手でシノから預かった代表者宛ての手紙を六条に渡した。

「シノさんから？」

六条はほっそりとした手で丁寧に封を破り、便箋を取り出した。

まさか本当にこの六条がユズリと折継という唯我独尊、気随気儘の二人を恐れ慄かせ、大男を突き落とし、町中で名を口にすれば阿鼻叫喚の図を生み出した、あの六条なのか？

「ああ、代表者集会。全員参加ですの？ 気が乗りませんわね」

六条はほうと憂い気に溜息を吐き、ユズリを見た。

「代表者の顔触れは相変わらずですの？」

「私が知っている顔触れは変わったって聞いてないけど。さっきも八卦院に折継、クチナワに同じ手紙を渡してきたし」

「相変わらず癖の強い方達ばかりですのねえ。最近クチナワさんや折継さんにはお会いしていないけれど御息災なのかしら？」

「息災でない二人なんて見たことないよ」

ぼそりと答えるユズリに、それもそうですわねと六条は軽く笑う。そして便箋を折り畳み封筒に戻すとじっとユズリを見た。

「な、何？」

「いえ、血は争えないものと思っておりましたの。シノさんも今の

ユズリさんと同じお年の頃にはそうして太刀を片手に町のごろつきを相手にしてらっしゃいましたわ。ふふふ。懐かしいですわねえ」

笑いながら六条はユズリの手握られた太刀に目をやった。
シノが今のユズリと同じ年の頃……ということは間違いなく存命の頃。少なくとも三十年近く前。すると六条は彼岸時間で三十年以上はこの町に換算になる。

最近では見かけないセーラー服といい口調といい、やはり彼女は戦前の女学生か何かだったのか。

「遊佐さん」

つらつらと考えていたところに六条の笑顔が向けられた。しかしなぜかその笑顔は先ほどまでと違って妙な冷気を纏っているように感じるのは気のせいか。

「女性の年を詮索するものではなくってよ？」

「っ！」

なぜわかった……実は読心術の使い手か？
それとも何かもつと化け物じみた何かか？

「遊佐の能面無表情でよくわかったね、六条……」

ユズリがやや暴言を織り交ぜながらも遊佐の心境を代弁するようにそう言つと、六条は花のように微笑んだ。

「嫌ですわ、ユズリさん。女の勘を侮つてはいけないといつも言っていますでしょう？ 貴女も女なのですからいずれわかりますわ」
勘と言つていいレベルなのか？

六条 6

それにしても上品に口元を押さえで笑う六条と、太刀を片手に握るユズリ。

見た目だけで判断するのなら間違いないユズリのほうが強そうだ。気の強そうな顔立ちやぎらぎらと煌めく刃物のような雰囲気。極めつけは最早体の一部と化しているのではないかというくらい馴染んでいる左手に握られた太刀だ。

対して六条は小柄なユズリより若干背は高いものの、たおやかという言葉を体現したかのよう。小さく白い顔には常に微笑を湛えている。何よりどう見ても彼女はとも見ても丸腰だ。ユズリのように太刀を手にすることなく、折継のように脇差を隠し持っている風もない。もしかするとクチナワのように何か奇妙な道具でも所持しているのかもしれないが。

確かに六条の年齢云々の際には彼女の笑顔は凍りついたが、今のところそれだけだ。実害はない。したがって今のところ、遊佐の恐れるべき対象に六条は入らない。

だがユズリと折継が揃って恐れる相手なのだ。何もないわけがない。

「……六条はさ、いつまでここに留まるの？」

ふいにユズリが口を開いた。どこか強張ったその顔を見て、六条はくすりと笑う。

「あら、わたくしがこちらにいてはご迷惑かしら？」

「そ、そうじゃなくて！」

ユズリは必死の形相で弁明する。

「六条は冥府に行って手順を踏めば生まれ変わるじゃん。地獄落ちが決まっているクチナワとは違って生前特に悪事を働いたわけでもないんでしょ？」

「そうですねえ。此岸で悪事らしい悪事を働いたことはございま

せんわね。わたくし女学校でも品行方正な優等生として通っており
ましたし。死に方が悪かったので家族に迷惑はかけてしまったでし
ようがそれも死後のことですし」

死に方が悪かった？

どういう意味かとユズリを窺うと、聞くなとばかりに慌てて首を
横に振ってきた。

「ですけどわたくし此岸ではひたすらに模範的女学生でしたから、
この町で羽目を外すことが楽しくなってしまうたのよね。女学
校では御国と殿方に尽くすよう散々説かれましたけれど、こちらで
はそんなこと誰も言いませんもの。強きが正義。そこに男女の隔た
りはなく、男女の力の差など此岸の常識もこの町には通用しない…
…このような場所は他にありませんもの。まだまだわたくしはここ
らで楽しんでいきますわよ」

本当に楽しげに六条はそう言った。

ユズリはといえば疲れ切った様子だ。

「ほどほどにしておかないと冥府に目をつけられるよ……」

「その辺りはうまくやりますわ。わたくし、クチナワさんほど要領
は悪くありませんもの」

六条 7

「まあ……要領が悪くないのは認めるんだけどさ。さっきも大男が落ちてきたんだけど、あれあんたでしょ？」

「大男？」

六条は頬に右手を添えて小首を傾げてみせた。覚えがないと言わんばかりに不思議そうな顔だ。

「上半身裸で、お腹のあたりに傷を負った男。……どう見てもこの塔から落ちてきたんだからあんたしかいないでしょ」

「ああ」

六条は声を上げて手を叩いた。

「上半身衣服も纏わずに此処まで昇ってこられた無粋な方のことかしら。ええ、それなら覚えがあつてよ。何せあの風体ですでしょう？ 変質者かと思つて咄嗟に自己防衛に走つてしまいましたわ」

自己防衛で人を十二階から突き落とされたのか、この女は。

彼女もやはりまともではなかった。

「まったく婦女子の前で服装も整えずに……ああ、恐ろしかったですわ」

わざとらしく六条は身震いしてみせる。

恐ろしいのか。それは突き落とされたというあの太男こそが言いたい言葉だろうに。

いや……突き落とされ？

そうだ。あの三メートルはあるだろう太男は突き落とされたんじやなかったのか。その上腹の横一文字に刻まれた傷からは出血していた。それも彼女が、どう見ても腕力があるようには見えない六条がやったと言うのか。

「自己防衛であれだけの手傷を負わせて突き落としたら普通は過剰防衛になるわよ」

ユズリがぼそりと呟く。

それと聞いて六条はにこりと艶やかに微笑んだ。

「問題ありませんわ。わたくしは普通ではありませんもの。この町における様々な特権を与えられるからこそ代表者などを務めておりますのよ?」

「いくら代表者がある程度免罪特権があるからってやりすぎな気も

……」

「六条ーっ! いるかぁ!?」

硝子の扉が開かれると同時にドスの聞いた声が辺りに響き渡った。

六条 8

見れば扉の前には顔全体に包帯を巻いて目鼻と口以外見えない和装の男が仁王立ちしていた。その両手には火縄銃が握られている。

「……六条、お呼びよ」

ユズリは冷めた視線を六条に送った。

「そのようですけれど」

六条は眉をひそめて男を上から下まで不躰なまで見つめた。

「わたくし、貴方のような方は存じ上げなくてよ。見ず知らずの他人に呼ばれるのは気分が良いものではありませんわ」

明らかな不快感をもって六条は男を睨み据えた。

「そもそも両手に銃だなんて、何て無粋な風体の方ですかしら。同じ空気を吸っていると考えただけでも吐き気がしますわ」

そう言って口元を白いレースの縁取りのあるハンカチで抑えた。

もちろんその言葉や仕草は見るからに血氣盛んそうな男の神経を逆なでる。

「この糞アマがあ……」

男の唸るような声にますますもって六条は眉を顰める。

「まあ……婦女子を前にして何て汚い言葉をお使いになるのかしら。礼儀も知らぬような輩を相手にするほどわたくし暇じゃありませんの。さつさとわたくしの視界から消え失せて下さらない？」

丁寧な言葉遣いは変わらずだが、言っていることは酷い。

「ふざけてんじゃねえぞ！ てめえにやられたこの顔の傷のケリはきつちりと返させて貰うぜ！」

男の言う顔の傷とやらは包帯に覆われているためまるでわからないのだが、男の言いがかりというわけではないのだろう。隣でユズリがうんざりした顔で六条を見ているのを見てそう確信した。

だが一応ここは聞いておくべきだろう。

「……止めなくていいのか？」

「冗談でしょ、絶対嫌」

本当に一応聞いただけで終わった。

「それより遊佐。少し六条とあの男から距離を取るわよ」

神妙な面持ちでユズリは遊佐に囁き、言うや否やこそそこそと後ずさっている。自信とプライドの塊の彼女らしからぬ行動だが、遊佐の本能か何かが彼女に倣えと訴えてくる気がするので足音を立てないよう静かに六条と男から距離を取った。

その間にも男は何事かをまくしたて、六条は汚いものを見るようにハンカチで口元を押さえたまま眉を顰めている。

六条 9

「……ああ、記憶の淵にほんのりと浮かんできましてよ。貴方、先日婦女子を無理やり遊郭に売り飛ばしていた下手人の手下じゃありませんの。その悪趣味なお着物、覚えがありますわ」

「ああああ思い出してくれて光栄だな！ てめえのせいで親分は冥府送り！ 組員のほとんどもてめえに半死半生の目に遭わされた！ この恨みはちつとやそつとじゃ晴れねえぜ！？」

何だ、ほぼ自業自得ではないか。どこにでもああいう逆恨みをしてくる輩というのはいるものだ。そんな悪党共を壊滅させたなら、六条はむしろ善人の類ではないか。

そう思い遊佐がユズリを横目で見ると、その横顔には冷や汗が浮かんでいた。

「何であの馬鹿、一度やられたにも関わらず六条の前に顔見せるのよ。馬鹿じゃないの、馬鹿って言うか大馬鹿じゃない。大迷惑よ」
そんなことをぶつぶつと呟いている。

そんな遊佐たちから少し離れたテラスでは男がさらに恨み事をまくしたて、その男と対峙する形になる六条は不愉快そうにそれを見ていた。

「とにかく！ てめえを殺つたとなりやあてめえにやられた他の連中に恩も売れるってなもんだ！ こころで冥府に行つとけや！！」

「……五月蠅いですわね」

ひやりとした声と共に、六条が手にしていたハンカチを手放した。風に乗るように白いハンカチはゆらゆらと揺られながら闇と灯りに彩られた地上へと落ちて行く。

「もう結構ですわ。貴方の耳障りな声などこれ以上聞きたくありませんし」

切れ長の目がずっと細められ、薄い唇が開かれた。

その瞬間、はっとしたように男が両手に握った火縄銃の引き金を

引き、二つの爆発音が鳴り響いた。

「……おいっ！」

遊佐は声を発しながらも、間違いなく撃たれたと思った。二発の鉛玉は外れようもない距離から撃たれあの細身を貫いたと、そう思った。

一秒にも満たない時間の後、咆哮が上がり血飛沫が舞った。

咄嗟の出来事のせいか、遊佐の脳は目の前に広がる光景をきちんと処理できていないらしい。

血飛沫と咆哮。

それからテラスに落ちる重々しい音。

六条の前にいた、まるで四角い壁に獣の手足をつけたような生き物が咆哮を上げ、その体から血を流し、そしてテラスへと崩れ落ちた。

それはまるで六条の盾になったかのように、いつからか六条の前に存在し、そして彼女を守るように倒れた。

六条は見る限り全くの無傷でそこに悠然と佇んでいた。そして自分を守った生き物を見下ろすと感情のない声で言った。

「そろそろ限界ですわね。もうよろしいわ。貴方は冥府へお行きなさいな」

途端、獣の手足がぴくりと反応し、傷から流れ出る血も厭わず壁のような奇妙な生き物はまるで風のようにどこかへと飛び去った。

六条へ銃を向けた男は遊佐と同じように、何が起きたのか把握できず茫然とその場に立ち尽くしていた。

放心状態だった二人の意識を現実へと向けさせたのは涼やかな声だった。

「——ヒガクシノハ」

六条の口からその単語が発せられるなり、六条へ銃を向けた男の全身から血が噴き出した。

包帯を巻いた顔も手足も胴体も例外なく、着物をも切り裂き、血が噴き出す。

「なあ、ああ、あああつ！！」

男は銃を取り落とし、己の身に起こっていることがまるで理解できないと言わんばかりに言葉にならない声を上げ、その場に座り込んだ。

六条はさらに言葉を發した。

「具音ケイ餓シヨウ」

耳に馴染まない音を發し、続ける。

「何処か遠く、わたくしの視界に入らぬ場所に」

冷え冷えとした声でそう口にするなり、全身血まみれとなった男が一瞬黒い影に包まれた。どこからか現れた影に覆われ尽くし、男の姿が見えなくなった。

そう認識する頃にはテラスに男の姿はなくなり、ただ先ほどの惨事が現実のものであったと証明するかのように血の後を残すばかりだった。

六条 10

テラスが血で汚れたから清掃が終わるまで外で時間を潰すからついてくるよう言った六条の後について歩き、大通りから細い道を一本入るとそこはそれまでの街並みとは少し様相が違った。

煉瓦レンガが敷かれた道は等間隔に配置された瓦斯灯ガスとうの明かりが照らす。辺りに見える建物は皆西洋的でまるで異人館のようだ。

「この町にこんな場所があったのか」

今まで見た場所はどこもかしこも和風趣味だったが。

「この辺りはわたくし達の世界で言う西洋文化を取り入れていますのよ」

前を歩く六条が振り返って微笑む。

「以前は何とも思わなかったのですが、最近はどういったものも懐かしく感じられますのよ。わたくしも生前はこういった建物を見てまだ見ぬ異国に胸をときめかせたものですわ」

「六条が西洋趣味だとは知らなかったわ」

遊佐を盾にするように最後尾からついてくるユズリが言うと、六条はくすりと笑った。

「わたくしはどちらも好きですわよ。父が西洋鼻屑せいようびいきだったものですから。幼い頃は異国の方のお宅にも連れて行って頂きましたし。けれど自国の文化を知らぬようでも困るということで本宅は英国の建築士の方に設計をお願いしましたが、離れや別荘は昔ながらの日本的なものでしたわ」

本宅にイギリスの建築士に離れに別荘。何となくそうではないかと思っただけだが、六条というのは生前よほど裕福な家の娘だったのだろう。やっていることはともかく、言葉遣いや立ち居振る舞いは綺麗なもそうだ。

「うんと幼い頃は浅草にも行きましたのよ。初めて十二階からの眺めを見た時の感動は今も忘れられません」

「ああ、それで塔がお気に入りの？」

「ええ。あの塔は凌雲閣りょううんかくにそっくりですから」

「凌雲閣？」

ユズリと六条の間に共通認識されているらしい単語を復唱すると、六条はにこりと笑って説明してくれた。

「東京の浅草にあった十二階建ての建物のことですわ。凌雲閣という名前だったのですけれど浅草十二階とも呼ばれていましたのよ。震災で半壊してしまっ取り壊されてしまいましたけれど、エレベエタアも設置されたモダンなものでしたのよ」

六条の言う震災というのは恐らく関東大震災のことだろう。確かあれは大正十二年のことだと聞いたことがあるから、やはり今さら考えるまでもなく六条は大正生まれの昭和の女学生のようにだ。

六条 11

「浅草なら私も行ったことがあるわ。浅草寺にお参りした後、花やしきっていう小さな遊園地に行ったわね」

「わたくしも浅草寺には詣でたことがありますわ。それに『花屋敷』にも。そう、此岸では随分な時間が経っているでしょうに、まだ残っているものもありますのね」

六条は含むもののない純粋な笑みを浮かべて嬉しげに言う。そうした姿を見れば年相応とこの場合は言わないのだろうが外見相応の、十代の少女らしい印象だ。

「花屋敷には動物も飼育されていましたが、今もそうなのかしら？」

「動物？ 私が行ったのも子供の頃だったからうる覚えだけど、確か動物はいなかったと思うけど」

ユズリは首をひねって考え込んだ。

「ああ……やはり全てがそのままとは行きませんわね。わたくしの幼い頃は多くの草花や見世物で溢れていたのですけれど」

そう言って六条は少し残念そうに目を伏せた。

それからしばらく黙って歩いていたが、ある店の前で立ち止った。「此处ですわ。わたくしのお気に入りのお茶店ですの」

見れば小さな洋館風の建物の扉の前には『珈琲』と書かれた金色のプレートがぶら下がっている。

「さあ参りましょう」

歌うような調子で六条は扉を開け店内へと入っていった。遊佐とユズリも顔を見合せながらもその後続く。扉を開くたびにカランカランとドアベルが鳴る。本当に驚くほどこの店は洋風だ。

そして店内も真っ白なテーブルクロスがかけられた丸テーブルが四つ。それぞれに椅子が置かれている。白い壁には硝子のランプが備え付けられ、薄暗い室内を柔らかな照明で照らしている。

「……いらつしゃいませ」

しゃがれた聞きとりづらい声がしたかと思うと、照明も届かない店内の奥から小さな影が歩いてきた。

照明の下にやってきた人影はユズリの半分の背丈もない。まるで幼児のような体格だ。手足は二本ずつ、鼻と口は一つずつで姿かたちは人間と変わらないが、何故か目隠しのように黒い布を巻いている。

その小さな目隠しの人は踝まである黒いワンピースに白いエプロン、片手に丸い盆を持った、ある意味給仕らしい様相をしていた。もちろん普通の給仕は目隠しをしていないが。

「ああ……六条さん、いらつしゃいませ……」

歓迎されていないのではないかというくらい抑揚の少ない声だ。だが六条は特に気分を害した様子もなく笑顔で応える。

「ごきげんよう、笹垣^{ささかき}さん。珈琲を三つお願いしますわ」

「かしこまりました……。好きな席に、どうぞ……」

それだけ言うと目隠しの給仕は灯りのない店の奥へと消えて行った。

六条 12

こんなことを思うのはどうかとも思うが、不気味な店員だ。それともそういう趣向の店なのか。

「何だか不気味な店員ね。愛想もないし。店自体は普通の喫茶店っぽいのに。何？　メイド喫茶ならぬ亡霊喫茶とか言わないでしょうね」

とりあえず思っても胸の内に留めておく遊佐と違い、ユズリは正直に口にした。それもあり辛辣に。

「冥土喫茶？　冥土を模した喫茶が最近流行りですか？」

四つ椅子が用意されたテーブルに座った六条が小首を傾げ聞いている。

「そっちの冥土じゃなくて女中とかのほう。メイドが「いらつしゃいませ御主人さま」とかお客に言ってくれる店が一時期流行ったのよ。今はどうだか知らないけど」

ユズリは六条の斜向かいの席に座りながら答える。

ここで遊佐はユズリの隣が六条の隣かという究極の選択を強いられることになった。

「ご主人さま？　最近では使用人を雇う家は少なくなったと聞きましたけれど、懐古趣味か何かですか？」

「そんな高尚なものかは知らないけど、現代では一般人でも御主人さまと呼ばれる機会を得られる数少ない場所ね」

「はあ……いつの時代も殿方の上昇志向は変わりませんのねえ」
感心したように六条は頷く。

「多分それとは違うけどね」

ぼそりとそう言ったユズリの声は聞こえてないらしい。

「ところで遊佐さんはお座りにならないの？」

六条は視線だけでユズリの隣の席を示す。そうなっては六条の隣に座るというのも妙だろうと思い、黙って彼女の示す席に座った。

「遊佐さんもわたくしやユズリさん達と同郷なのですわよね？」

「一応は」

遊佐が答えると六条は少し物珍しそうな顔をした。

「それなのにもうこの町に馴染んでらっしゃるのね。わたくし達の此岸には三途の川の話は伝わっていても、町のことなどは伝わっていないでしょう？ 初めは困惑したり致しませんでしたの？」

「まあ若干は戸惑ったけど最近慣れてきたというか……」

ユズリに連れまわされると慣れざるを得ないというか。

六条は感心したように息を吐いた。

「最近の方は順応性が高いんですね。わたくしはこの町に来た当初は随分戸惑ったものですけど」

「六条が！？」

思わず、という感じにユズリが声を上げた。よほど意外だったのだろう。

六条はにつこりと微笑んでユズリを見た。

「あら、シノさんなどからお聞きではありません？ わたくしもこの町に迷い込んだばかりの頃は右も左も上も下も分からず不安ばかりでしたのよ」

あからさまに信じられないという顔でユズリは六条を凝視している。

「ユズリさんや折継さんのように前知識を得てから町に入ると、わたくしのように訳もわからず気付いたらば町にいた者とは違いますわ。偶然わたくしは町で身を守る術を知り、当時の管理者の方にも良くしていただいたので今なおこの町で不自由なく暮らせていますけれど、そうでなければ疾うに何処ぞへと引かれてしまっていたでしょうね」

「身を守る術って言うとき呪文みたいな？」

遊佐の言葉に六条はにつこりと笑う。

「あれは呪文ではなく忌み名いみなですよ」

六条 13

「忌み名？」

聞き馴染みのない言葉だ。

するとユズリが補足するように答えた。

「本名のこと。前に言ったでしょ？ この町で本名を名乗るなつて名前と魂は結びつきが強いから、名前を知られるつてのは危険なのよ。今では此岸ではこういう習慣もほとんどなくなつてるけど昔は普通だったみたい。親とか配偶者とかしか知らない名前とか、臣下は呼んじゃいけない名前とか」

「ああ、そう言えばそんな話も聞いたことがある気がする。町で本名を名乗るなつてそういうことだったのか」

「そういうこと。忌み名と普段名乗る名前が違つて人は今はほとんどいないから、名前を知られるのは危険なわけよ。忌み名は魂と肉体と密接に繋がっている。特にこの町では名前から魂も記憶も指先一本までも支配されてしまう。生死の間に存在する化け物じみた連中に名前を知られたら大変よ。相手が手放すまで死もなく支配下に置かれることになるんだから。そうなると別の世界へ引かれたり、あるいは餌になったり奴隷のように扱われたりと碌な目には遭わないわよ」

そこでユズリはハツとしたように六条を見た。

六条はやはりにこにここと微笑んでいるが。

「いや……今のは一般論で……」

しどろもどろにユズリが弁明するように口にしても六条はひたすら笑みを浮かべているだけだ。

「別によろしいですわ。遊佐さんもこの町に出入りしているならば、いずれわたくしの話は嫌と言うほど聞くようになるでしょうし。不意ながら本当に碌でもない噂ですけど、根も葉もない言い切りはしませんわ」

「ええと、つまり？」

遊佐の疑問に答えるように六条は言った。

「わたくしは町に出入り、或いは住んでいる方の名前を複数握っておりますの。お名前はもちろん有効活用しておりますわよ。攻守問わず、ありとあらゆる手段にお名前を使っておりますの」

艶やかな笑みで六条はそう言った。

つまり先程六条を守るように倒れた壁のような生き物も、あの影のようなものも六条に名を握られた連中と言うことか。

横目でユズリを見るとどこか青ざめた顔で俯いているから、間違いないくそうなのだろう。

他者を隷属し、使い倒す女……これは確かに怖い。ユズリや折継でなくとも普通に怖い。

「あら。遊佐さんもユズリさんも顔色が悪いようですねどうかなさいますか？」

「……いや」

「……別に何でもないわ……少し冷えただけ」

「そうですか？」

六条は尚も笑顔だ。

「あの……お待たせ……しました……」

重い空気に支配されたテーブルに、あの目隠しをした女給がコーヒークップが乗ったトレイを乗せてやってきた。

「珈琲三つ……お持ちしました……」

言いながら女給は遊佐達の前にカップをひとつひとつ置いて行く。真っ白なカップからは湯気を立てた濃い褐色の液体。見たところ普通のコーヒード。

そして

「それでは……ごゆっくり……」

「ええ。ありがとう、笹垣さん」

六条の言葉に女給は深くお辞儀して音もなく去っていった。

「さあ、では頂きましょうか。此処の珈琲はとても美味しいんです

のよ
「

嬉しそうに言う六条に無言で頷き、遊佐とユズリも本来なら美味しいと思えそうな味のコーヒーを黙って飲んだ。

六条 14

「コーヒーごちそうさま」

六条が三人分のコーヒー代を払ってくれ、ユズリの言うところの冥土喫茶を出たところで六条とは別れることになった。

「ごちそうさまでした」

遊佐も軽く頭を下げ、礼を言う。

「いいえ。ユズリさんも遊佐さんも礼儀正しいですわね。シノさんやご家族の方の躰がよろしいのね。素晴らしいことですわ」

六条は満足げに微笑んでいるが、遊佐の中でもこの町の危険人物上位に名を連ねた彼女に対し礼を欠ける人間などそうそういまい。実際あの不遜なユズリですら彼女に対してはいくらか控えめなのがその証拠だろう。

「ではわたくしはそろそろ塔へ戻りますわ。清掃も終わっている頃でしょうし。ユズリさんも遊佐さんもまたお気軽に遊びにいらして下さいましね」

「ん、まあまた」

ユズリの曖昧な答えにも六条は笑みを崩すことなく、優雅に踵を返して振り返った。

「ふふ。ユズリさんも遊佐さんもご健闘遊ばせ。それでは、ごきげんよう」

意外にあっさりと六条は革靴を鳴らし、来た道に戻っていった。

ユズリ曰く、六条とは反対方向に用事があるとのことと遊佐とユズリは反対へ向いて歩きだした。用事というのが嘘か本当かは知らないが。

無言で歩き、六条との距離も随分離れたらうという頃、ユズリが立ち止って大げさなくらい大きく息を吐いた。

「あー生きた心地がしなかった!」

「……本当に苦手なんだな」

あのユズリがここまであからさまに苦手を公言するとは。

ユズリは再び歩き出しながら疲れた風に答えた。

「そりゃそうよ。子供の頃のトラウマなんかでもう本能的に駄目なの」

「まあ、赤の他人を道具扱いして使い倒す奴なんて普通に怖いかもっともユズリもその類の人間に見えるが、こつも露骨に苦手としているのだから遊佐が思っているよりユズリは良心的なのかもしれない。」

ところがユズリは遊佐の何気ない一言に眉を顰めた。

「別に私は町の腑抜け男共と違ってそんなところ怖くも何ともないわよ。私が言ってるのは……ああ、そう言えばあの話は出なかったわね。そりゃそうか。六条がわざわざ自分で言うわけないものね」

「あの話？」

「私やら折継が六条に対して昔から恐怖を捨てられない理由」

「他人を隷属させて使い倒す以上にさらに恐れられる理由があるのか、六条は」

未恐ろしい。

「私や折継、町の性悪共が他人を使い倒すくらいで恐れると思うの？」

「いや、まったく思わない」

思わず即答するとユズリは不満げに眉を吊り上げた。

「何かそれはそれでムカつくわね……。まあとにかく、さっき折継が言ってたでしょ？ どう足掻いても理解できないような存在が一番怖いって」

「ああ。そんなことも言ってたな」

あの態度で怖いと言われてもまったく真実味がなかったが、言わんとしていること自体はわかった。

「私達にとっては六条がソレよ」

「ソレ、って理解の範疇を超えた奴ってことか？」

「そう」

ユズリは再び歩き出して前を向いたまま話し出した。

「町の連中が六条を恐れるのもだいたいはそれが理由よ。まあ六条の気まぐれで隷属させられたり酷い目に遭わされたりした奴も多いから、その辺が原因の奴もいるだろうけど」

理解の範疇を超えた何か。

意思疎通が叶わない何か。

今しがたまで話していた六条がそうとはとても思えない。まして彼女はこの町に来た当初に随分困惑したというようなことを言っていたし、今まで会った代表者たちなどに比べればよほど「普通」に思えたくらいだ。

「信じられない？」

ユズリは遊佐に振り返って冷めた視線を向けてきた。

「……正直想像がつかない」

思ったままに答えるとユズリはまた前を向いて言った。

「六条つてさ、調べようと思えばいくらでも此岸でどんな人間だったか調べられると思わない？」

「まあ時代の特定は難しくなさそうだし、いわゆる上流階級の出身ばいし、あの制服も実際に生きていた時に着ていたものなら難しくないかもな」

まして彼女は言った。死に方が悪かった、と。

とすれば病死など自然死ではない可能性が高い。時期を絞り、制服から出身校も探し出せば生前の身元を知ることが難しいのかもしれない。

「うん。だからいくらでも真実らしいことを調べることができるのよ。まあ私が六条のことを知ったのは町で聞いた噂話からだったけど」

「噂」

「そう。あの通り六条はけっこうな有名人だから、あちこちで尾ひれ背ひれがついた噂が囁かれてたりするんだけどその中に、六条に忌み名を握られた不運な連中の一人に、どういうわけかずっと手

放されないで六条に隷属されたままの奴がいるっていう話があったの」

「余程気に入った奴なのか？」

さあ？ とユズリは乾いた声で言った。

「さつきも見ただろうけど六条にとつて他人の存在なんて使い捨てみたいなものでしょ？ その六条が絶対に手放そうともしない奴。特に腕が立つわけでもない。何か秀でた力があるわけでもない。でも絶対に六条はその名前を手放さない。冥府へ送らせない。何があつても自分の手元から離さない」

その声はどんどん低く重くなつていく。

「六条はその名前を……この場合は存在をって言つた方がいいかもしれない。そいつを決して手放さない。当初こそ防壁代わりに使つたり、パシリにしたりもしてたらしいんだけどすぐに他人の目に触れないよう、独占するかのうちにそいつの存在を表に出さなくなつた」

遊佐は眉を顰めた。

「何だか話の方向が掴めない」

ユズリは少し黙つた後、無感情に言った。

「六条はね、此岸で殺されてこの町に迷い込んだの」

六条 15

殺されて。

その短い言葉は重い。とても重い。他人でない者の話ならば尚更だ。

「話の出元は知らない。多分六条と同時期に此岸で生きていた誰かなんだろうけど、今となつては有名な話よ。私と折継がまだ本当に子供の頃、偶然耳に入ってきたの」

一息置いてからユズリは口を開いた。

「六条は自分を殺した男の忌み名を握り、その存在を手放すことなくずっと手元に置いているって」

「自分を殺した男を？」

ユズリは頷く。

「そう。自分を騙し、殺した男を今もまだ六条は手放さずにいる」それは六条なりの復讐なのか。長い長い時をこの生死の狭間の町に置くことは彼女が自らの生を奪った者への報いとしたのか。

「生前、意外と男運悪かったらしいのよね。六条は」

そしてぼつりぼつりとユズリは話し始めた。

まだ太平洋戦争前の昭和初期。

後に六条と名乗る彼女は、とある資産家の令嬢として東京の女学校に通いながら何不自由ない日々を送っていた。女学校を卒業すれば家の決めた相手と結婚し、生涯不自由なく暮らせることがほぼ決まっていたはずの彼女の人生はある日、女学校の友人と出かけた音楽会で一人の男と出会ってしまったことで大きく狂い始めていった。男は某名家の庶子で、出会ってすぐに二人は恋に落ちた。少なくとも周囲からはそう思われていたし、そして彼女自身もそう思っていた。

だが男は名家の出とはいえ立場は非常に危うい。本妻が生んだ異

母兄弟もいる身では尚更。いつ一文無しで放り出されてもおかしくない男は保険をかけた。

それが上流階級の令嬢との結婚だった。

仮にも名のある家の出身の男だ。それは不可能じゃない。結婚相手に財力権力が伴えば男の実家での地位は安泰となり、また結婚相手の家の権威も手に入る。だから男は複数の令嬢と親しく付き合っていた。その中でも特に容姿も実家も抜きん出ていたのが彼女だった。

男は彼女と結婚の約束をした。

ところが、それからしばらく後に男は某華族の令嬢と知り合う。家格も財力も男の実家よりも上の、まさに男が求めていたような相手だった。

だが男は既に当人同士だけとはいえ結婚を約束した身。男は思う、彼女が邪魔だ。

そして男は彼女を殺した。

疑うことを知らない、男のことなど一遍も疑っていない彼女を殺した。

後に男は証拠も揃い逮捕目前というところで痴情のもつれから親しくしていた令嬢の手で殺される。

上流階級の子女たちによって構成されたこの事件は世間を騒がせる。新聞や週刊誌でも大々的に報道された。すぐさま圧力がかけられこと、また情勢不安もあって忘れられたように事件は消えて行ったが、そのセンサーシヨナルな事件は人の記憶から消えたわけではない。

知る者は知る事件として、調べればいくらかでも調べられる事件として残った。

六条 16

「そして彼女は六条としてこの町の男達を恐れさせる存在になりました。男は先に町に迷い込んでいた六条によって名を握られ死ぬく生もなく、今なお彼女に隷属させられているのです——おしまい」
そう言つてユズリは話を終えた。

それからしばらく、二人は無言で歩いた。煉瓦敷きの道にかつかつと足音が大きく響いた。

「傍から聞いた限りは酷い男だと思った」

遊佐がそう口にするユズリは皮肉っぽく笑った。

「誰が聞いたつて地獄落ちは確定でしょうよ。多分冥府でもそう決定づけられるだろうけど、六条が未だに冥府へ送ろうとしないからね」

そしてユズリはやけに神妙な顔をして続けた。

「話を聞いた時は理解できなかった。今も理解できないけど」
遊佐は黙つてユズリの言葉を聞いていた。

「まだ私も折継も子供の頃にこの話を聞いた。お父さん達でなく多分噂話か何かだったと思う。子供ってけっこう残酷なこと口にするじゃない？ 私達も例に漏れずそういう子供だった。私達は六条本人にこの話の真偽を聞きに行ったのよ。『六条は本当に殺されてこの町に来たの？』ってね。我ながらろくでもない子供だったわ。でも六条は答えた」

あの花のような微笑みを浮かべて答えた。

——ええ。そうです。

「その上私達はまだ聞いた。『何で自分を殺したような男を、冥府に送つて地獄に突き落としてやらないの？』って」

うんざりとした顔でユズリは息を吐いた。

「本当に無神経な子供だったわ、私も折継も。……その罰かしらね。私達はその直後、生まれて初めて本能的な恐怖ってやつを味わった」

六条は笑った。

艶やかにより一層笑みを深め、頬をほんのりと染め、うつとりとした表情で答えた。

——だって、愛しいものはずっとずっと誰の手にも渡さず自分の手元に置いておきたいでしょう？

「そして言ったわ。自分を騙して殺した男を今も愛してる。だから誰の目にも触れないようにずっと自分だけの物にしておくんだって……本当にうつとりと語ったの。その時、私達は初めて町の連中が六条を恐れる意味を理解した。否応なく本能で理解させられた」

無垢な少女のように歌うように六条は続けた。

——あの方は誰にも渡さない。この町でなら、永遠にあの方はわたくしだけの物。死という終焉もなく、ずっとずっとわたくしはあの方を愛することができる。

「……怖かった。六条そのものが。到底理解できない思考を持つ彼女が」

そう語るユズリの表情は険しい。

「まだ子供だったから本当のところ、六条の言っている意味はよくわかってなかったんだけどね。ただあの時の六条の笑みと嬉しそうな声に、私達は恐怖した。背筋が凍りつくように感じたことは今もよく覚えてる。私達は一目散にそのまま走ってお父さんたちの所へ帰ったわ」

ユズリの左手が太刀を強く握りしめる。

「お父さんの顔を見た途端、緊張の糸が切れたって言うのか、怖くて怖くて泣いた。あのふてぶてしい折継の奴ですらがたがた震えて

たわよ。……あの日、私達は狂気つてやつに初めて直面したの」

それからユズリは遊佐へと顔を向けた。

「六条はその男に関するすべてに狂ってる。忠告しておくわ。六条にはあまり関わらない方がいい。いつどうやって、あの男に関する何かに接して六条の逆鱗に触れないとも限らないから。実際、そうやって六条の地雷に触れて半死半生の目にあつた奴は少なくない」
いつになく真剣な声でそう言つて、ユズリはまた前を向いた。いつの間にか西洋的な通りを抜け、色とりどりの提灯と鬼火が舞う通りへと戻つてきていたようだ。

ユズリは何を言うことなく、唇を引き結んだまま喧騒の中を歩く。その隣を歩きながら遊佐は思う。

ユズリの言うとおり、六条は狂っているのかもしれない。

ただ彼女のようにそれを恐れる気持ちも、厭う気持ちも湧いてこないのは——……。

六条 16（後書き）

これで迷い夜話中一番長くなってしまった六条編は終わりです。
次でエピソードのような感じになるよう書いていきたいと思っています。
ここまでおつきあい頂きありがとうございました。

おつかいを終えて 1

管理者はこのおつかいを頼まれた時と変わらず賑わう大通りの団子屋の縁台に座っていた。彼は遊佐とユズリの姿を認めると軽く手を挙げ、人の良さそうな笑みを浮かべた。

「お帰り。二人とも」

「タダイマ」

ユズリは惘然とした表情で管理者の向かいの縁台に座った。遊佐もその少し離れた場所に座る。

「お使いは無事果たせたかい？」

管理者は娘の機嫌になどおかまいなしにこやかに尋ねてくる。
「当たり前でしょ」

管理者の横に置かれた皿の上に並んだ団子に手を伸ばしながらユズリは答える。

「八卦院、折継、クチナワ、六条。全員にきちんと渡してきましたあ」

「そうかい。それは御苦労さま。遊佐くんも代表者達とは話せたかい？ 面白い連中だろう？」

「……なかなか見ないタイプだとは思いました」

一応言葉を選んでそう答えると、管理者は満足そうに笑って大きく頷いた。

「うんうん。彼らは実に面白いだろう。この町は面白い人材の宝庫だからね、特に代表者なんていうのはその極みなんだよ」

「お父さんが何をもって面白いと言っているのか私には理解できない」

ぼそりと呟いたユズリの言葉に管理者は人畜無害そうな笑みを向ける。

「おや。ユズリにはまだ彼らの面白さがわからないかい？ それじやあまだまだ管理者の器には程遠いな」

「何？ 管理者って変な基準を持ってないとなれないわけ？ て言うかお父さんだけでしょ。あの際物揃いを面白いなんていう酔狂は」
「お父さんは人を見る目が優れているからね。その域に至らないユズリから見ると酔狂に見えるかもしれないな」

「そーおですかーあ」

あくまで余裕の笑みを崩さない管理者にユズリは太刀を横に置いてそっぽを向いた。

あの傲岸不遜、傍若無人の彼女もさすがに父親相手にはそれほど食ってかからない。もつとも実の父でなくとも彼女をうまくあしらえる人物ならそうなのかもしれないと思った。

「そう言えば折継くんにはよく会うが、六条や八卦院、クチナワには最近会っていなかったな。三人は元気だったかい？」

団子の乗った皿を差し出してきながら管理者は尋ねてきた。ありがたく遊佐は団子を一串手に取り、ユズリもまた新たな団子に手を伸ばしながら答える。

「どうせ次の集会の時に会うんでしょ？ その時にわかるよ。ゼーんぜん変わってないってことが」

ひねた調子のユズリの答えに管理者はああ、と声を上げた。

「手紙の中身を見たのかい？ まったく、人様の手紙を勝手に開けるなんてブラシバシーの侵害じゃないか」

「失礼ね、言いがかりはやめてよ。見たんじゃなくて八卦院が教えてくれたの！」

眉を吊り上げて詰め寄るユズリに管理者は笑顔で答える。

「もちろん分かっているよ。お父さんの娘がそんなマナー違反をするわけないってことくらいよく理解しているとも。ちょっと言ってみただけじゃないか。ユズリは冗談が通じないなあ。そうは思わないかい？ 遊佐くん」

「……はあ」

突然話を振られても曖昧に返事をするしかできない。

ユズリ相手に冗談を言おうなどという気は今まで起こしたことも

ないし、恐らく今後とも起こすことはないだろう。遊佐はそんな己を危険に晒すような真似をしてまで冗談を口にするような趣味はない。

「ユズリももう少し冗談が通じるようになれば一皮剥けると思うんだが、これはまだまだ先になりそうだね」

ふうとわざとらしく溜息を吐いて首を振る管理者にユズリの眉がさらに吊りあがる。

「冗談ばかり言つてて折継みたいになつたらどうするのよ！ 八卦院やクチナワみたいならともかく、あんなヘラヘラ馬鹿になつたら次代の管理者になんかなれやしない！」

「折継くんはあの性格がいんじゃないか。先代の折継……彼の父親は割と猪突猛進なタイプだったが、あの父親を見て育つたとは思えないほど折継くんは面白く育つたものだ」

「どこがつ！？」

「まあ八卦院やクチナワのようになるのも悪くはないと思うけれど、八卦院はあれで商売上手だし、クチナワはまあかなり危ない奴だけと悪い奴ではないからね」

かなり危ない奴と悪い奴はイコールではないのか。さすが管理者ともなると懐が深いらしい。

おつかいを終えて 2

「でもお父さんとしては六条の言葉遣いや立ち居振る舞いはぜひとも見習ってほしいところだと思っっているんだけれどね。さすが彼女は戦前のお嬢さんだけあって所作のひとつひとつが綺麗だ。ユズリも刀ばかり振り回していないで、もう少し落ち着いた仕草を身につけてもいいと思うんだよ」

「それこそ冗談でしょ！？ 六条に似るとか父親の言葉じゃないわよ！？」

ユズリは青ざめて僅かに身を引いた。

よほど六条が苦手なのだろう。いくら本人から原因となった話を聞いたとは言え、やはり奇異なことだと思ってしまう。

団子をひとつひとつ頼張りながら先程までのことを思い返していくと、ふいに一つ、疑問が湧いた。

「そう言えばさっき、六条の生前はいくらでも調べられそうって言うってたけど、それなら本名を知ることできるんじゃないのか？

それこそ六条本人がしているように支配下に置くこともできるんだろ？ そういうことを考える奴ってのはいなかったのか？」

するとユズリは事もなく答える。

「いるんじゃない？ 私も昔は調べたし」

「調べたのか」

「調べたわよ。こっちも何度も身の危険を感じたからね」

胸を張るユズリに対し、管理者は軽く息を吐く。

「興味本位で人の過去を暴こうなんて、我が娘ながら一体どこでそんな悪趣味に染まったのか。嘆かわしいね」

「間違いなくお父さんの遺伝子と教育の賜物よ」

管理者を横目で睨んでからユズリは続ける。

「六条は少なくとも死んで七十年くらい経ってるわけだけど、中にはもちろんそうやって何とか六条の本名を握れやしないかって思っ

た奴もいたらしいわよ。ま、全員それは徒勞に終わったってわけだけど。私も例外なくね」

不満げにユズリは口を尖らせる。

「お前も？」

「そう。だって六条の本名はとつくの昔、ここに流れ着いてきてすぐに握られてたんだもの」

その言葉につい目が丸くなる。

「いたのか？ 六条の本名を握る奴が？」

「そ。実は本名を知って支配下に置けるっていうのは先着一名様限定なの。私達が六条の本名に辿りついた時には既に六条は他人の支配下にあつたってわけね」

「支配下に……六条を？ けどさっきの様子じゃそんな風には」

「六条の本名を握っている相手は六条を支配下に置くのが目的じゃなかったからね。あくまで保護のつもりだったらしくて。そうですよ？ お父さん」

娘に話を振られ、それまで黙っていた管理者が彼女の話を引き継いだ。

「六条がこの町に来た当初、当時の管理者が同郷のよしみだか何だかで六条の本名を知ることと彼女の名が他の連中に知られてうっかり引かれたりしないようにしたそうなんだよ」

「当時の管理者」

当たり前だが、今現在目の前にいる管理者の以前にも管理者という役職に就いていた者は存在するらしい。確かに六条がこの町に来た当初を七十年前程度と想定するなら、シノとてまだ此岸で生きるどころか生まれてすらいない。

「大変に気まぐれなお人でね、今は冥府の高官となっているよ。いい加減死後をゆっくり過ごすなり生まれ変わるなりすればいいのね」

その当時の管理者とやらと何か因縁でもあるのか、どこか疲れた風にシノは溜息を吐いた。この人物がそんな顔をするなど、ユズリ

が怯える以上に希少なこともかもしれない。

本当に今日は珍しいものが多く見られる日だ。

するとユズリが性格の悪そうな笑顔で管理者を見ていた。

「あーあ。そんなこと言っているの？ あの人はまだまだ現役のもりなんだから、うっかり聞いたら大目玉じゃない」

その言葉からするに、ユズリもその当時の管理者とは知り合いなのか。

「お父さんがこんなこと言ってましたよーってうっかり私が口滑らせちゃったらどうしょー」

わざとらしい言葉に管理者は軽く笑う。

「お父さんは娘が父を裏切るようなことはないと信じているからね。そうとも、我が娘は父親を裏切るような真似をするわけない、お父さんは心からの信頼を置いているんだよ。……だからその信頼を裏切るような真似をされたら、お父さん怒ってしまうよ。別に怒ったからといって、ユズリに与えた権限を取り上げたり町に出入り禁止にしたりなんかはしないけどね」

最後に「多分」と付け足し、輝かしい笑顔を浮かべて言った。

それは脅迫だろう。まごうことなく。

もちろん娘のユズリがそれに気付かぬはずもなく。管理者から顔を背けるようにして、「冗談だよ、冗談……」と言って無心に団子にかじりつき始めた。

やはり父親のほうが上手だ。

おつかいを終えて 3

「さすがお父さんの娘だ」

管理者は打って変わったように陽気に笑った。そうしていると若くも見えるが、その外見は四十歳半ばかそれくらいだ。ユズリに聞いた話によると、それは管理者が彼岸に渡った際の頃の姿なのだそうだ。

この町には既に此岸で死した存在が多く存在する。だが彼らが皆管理者のように死んだ当初の姿で過ごしているのかと言えばそうでもないらしい。

生きていた頃、強い思い入れがあつた頃に過ごした姿でいる者もいるし、服を着替えるように好きに外見年齢を変えて過ごす者もいるのだとか。遊佐の知る限り、管理者が現在の四十半ばの姿以外で過ごしているところは見たことがない。娘であるユズリもそう言っていた。

管理者などという役職に就くほどの力量を持つのなら自在に外見年齢を変えるくらいできるのでないかとユズリに尋ねたら、「何度聞いてもはぐらかされて真面目に答えてくれなかった」と忌々しげに答えた。管理者は娘に対しても例外なく秘密主義らしい。それが管理者という役職ゆえのものなのか、生まれつきの性質なのかはわからないが。

そんな遊佐の思考は、団子は食べ終えてしまったのか、辺りに飛び交う鬼火を太刀の柄でつつくようにしていたユズリが声を上げた。「そつえば今度の集会って代表者全員参加なんでしょ？ 折継の奴も随分物々しいとか言ってたけど、何か面倒でもあつたの？」

娘の問いに管理者は笑みを崩さず答えた。

「そんなこと、代表者じゃないユズリに言えるわけがないじゃないか」

ユズリの顔が引き攣る。

その顔に気圧された、というわけではないのだろうか管理者は小さく微笑んで続けた。

「まあ厄介な案件が冥府から回ってきてね。その対策会議というところだ」

「ふーん」

ユズりはしばらく探るように管理者を見ていたが、まさに柳に風という風情に微笑んでいる相手には無駄だと悟つたらしく、斜向かいの店で煎餅を買ってくると言って大通りの雑踏へと紛れていった。そして後に残されたのは遊佐と管理者の二人だけだ。

思えば管理者と二人になったのは遊佐が初めてこの町に足を踏み入れて以来だ。見知らぬ町で当てもなく追うべき相手を探していた時に知り合ったのがシノだった。

町に慣れていないのだということはすぐに知れ、シノは自分がこの町ではそこそこに顔が利く存在だと話した。ならば遊佐の探し人を知らないかと尋ねたところ、生憎と管理者も心当たりはなかった。それから少しばかり話しこみ、何を思ったのか管理者は将棋で自分を楽しませてくれたら積極的に手助けをしようと提案してきた。

もともと結局その対局で勝敗がつくことはなく、さらにそこでユズリがやってきた。結果として遊佐は管理者の協力とその娘という案内人のような存在を手にしたわけだが。

団子を食べ終え残った串を片手にぼんやりしていると、管理者が遊佐の手から串を取って数本の串だけが置かれた皿に置き、店の奥に声をかけて皿を下げさせた。

「うちの娘はなかなか面倒な子だろう」

唐突に管理者はそんなことを口にした。大通りに視線をやったまま管理者は続ける。

「強情で気位が高く、口を吐けば毒ばかりで。君にも随分きつい物言いをしているようで、あれの父親としてお詫びするよ」

そして遊佐へと目を向け、軽く頭を下げた。

「いえ、別に謝られるほどじゃ……だいぶ慣れたので」

意外ともいえる管理者の行動に、遊佐は軽く戸惑いを感じながらも答えた。

管理者は顔を上げると、苦笑しながら言った。

「昔はあれでもう少し素直でかわいげのある……まあ普通の子供だったんだよ。人見知りで泣いてばかりで」

そう言えばクチナワもそんなことを言っていた。今のユズリから知らない遊佐には到底想像もつかないし信じられないことだが。

「あれがああいう……好戦的というか排他的というか、そういう風になってしまったのはどうも私のせいみたいだね」

「え？」

管理者大通りに目を向けながら頭を掻いた。

おつかいを終えて 4

「私はユズリがまだ子供の頃にすっかり風邪をこじらせて、本当に突然ぽっくり死んでしまつてね。そして母一人に子一人残されて、あの子は自分がすっかりして妻を守らなければと思つたらしい。その上私が死んですぐにあの子がこの町にやってきた時、私の分までお母さんを支えてあげてくれと言つたんだけどね、それがきっかけになつたのかこう……人に弱いところを見せたがらない、強い自分を演じようとするようになってしまつたらしい。しばらくして冥府の上役からあの子もいずれ管理者候補になるだろうからと再び町に出入りするようになって再会した時は随分驚いたよ。……まあ私の家系の女性はああいう性格の人も多くいるから、ああ間違ひなく私の娘だなあとも思つたんだが」

管理者は懐かしむように、零すように笑つてそう言つた。

どこか超越したような印象の彼もやはり父親なのだと、その時初めてそう感じた。

「……まあ面倒な性格の子だが、それでもユズリは私の大事な娘なんだ。いくら死人となつた身とは言いえそれは変わらない。死人が此岸での出来事に干渉はできないが、でもこの町は私の管理下にある、生死の境も曖昧な場所だ。ここだけでは私はあれの父親面することが出来る。過保護にするつもりはないが、それでも私は私の目の届く範囲でくらは出来るだけユズリを危険な目に遭わせたくない。たとえそれが冥府の意向に背こうともね」

柔和な笑みを浮かべたまま静かな、けれど強い意志を伴つた声で管理者はそう独りごちるように言つた。

そして管理者は遊佐に向き直つた。その顔からは笑みが消え、刃のような鋭い視線が遊佐を射竦めてきた。

「私はあの子の害となる物はどんな手段を以てしても排除するよ。それは君とて例外じゃない」

静謐な声なのに威圧されるかのようだった。

ああ、これは警告だ。牽制だ。

背を冷たい汗が伝う。

やっと気付く。癖はあるもののこの温和な男に、異形も異常も異様も当たり前の、あらゆる物の境界に存在する町の管理者など務まる理由が。

言葉を発することも忘れた遊佐に、管理者は改めてにこりと笑いかけた。

「ふふ。そういうわけだから、君も無闇矢鱈に危険に首を突っ込んではいけないよ?」

まるで先程の静謐な鋭さが嘘だったかのように管理者の顔は穏やかだ。

ユズリは六条こそを恐ろしいと言ったが、遊佐にとって彼女はそれほど恐ろしいと感じる存在ではない。まだ彼女ほど六条のことを知らないからそう思うのかもしれないが、それよりもこの町で一番恐ろしいのはきっとこの管理者だ。

この男は娘の、ユズリに実害が及ぶなら誰であろうと何であろうと容赦しないだろう。迷うことなく躊躇うことなく害を取り除くだろう。その冷徹さは恐ろしい。穏やかさに覆われた彼の内こそが遊佐にとって畏怖すべきものだ。

正気を保ちながら、躊躇も迷いもなく肅然としていられる管理者の精神性こそがこの町で真に恐るべきものなのか。だからこそ、この町の誰も彼もがシノを管理者として認めているのかもしれない。認めざるを得ないのかもしれない。

「何男二人でじーっと見つめあってるのよ。キモいわね」

険のある声音が頭上から降ってきた。

言うまでもなくユズリが目の前に立って見下ろしていた。その片手には煎餅の香ばしい匂いが漂ってくる紙袋がある。随分大きな袋だと思って見ていたのが伝わったのか、ユズリは紙袋を見せつけるように突き出してきた。

おつかいを終えて 5

「店主がおまけしてくれたの。一人じゃ食べきれないような量のお煎餅をもらったからあんたも食べたらず？ お父さんも食べるでしよ？」

「ああ、いただくよ」

管理者は穏やかな表情を浮かべたまま、紙袋の中から随分大きな醤油煎餅らしきものを手に取った。

「ほら、遊佐も」

ユズリから強引に渡された煎餅はやはりかなり大きな丸い煎餅だった。目玉焼きほどのサイズの煎餅など初めてお目にかかった。

「随分でかいな」

「この町の名物のひとつなのよ。美味しいんだけど一枚食べたらずなかいつぱいになっちゃうのよね。店主がおまけしてくれたからありがたくもらってきたんだけど、さすがに三人でもこんなに食べられないわね。どうせ私は持ち帰れないしお父さん、いる？」

「お父さんが持ち帰らないとユズリはうっかり此岸に持ち帰りかねないからね。残りは私が責任もっていただく」

「持ち帰らないわよ。子供じゃないんだから」

ユズリは不満げに口を尖らせながらまた管理者の向かいに座った。それから思い出したように遊佐に振り返った。

「そうだ。遊佐もこの町の物は基本的に持ち帰り禁止だからね。手続きしないで持ち出したりすると厳罰ものだから気をつけなさいよ」

「今のところ持ち帰ったことはないけど駄目だったのか」

「駄目なんだつてさ。この町から此岸に持ち帰ったら混乱させるよなものもあるでしょ？ どうしてもって時はお父さんの、つて言うか管理者の許可が必要な。まあお父さんは滅多な事じゃ許可を出してくれないけど」

そう言つてユズリは恨めしげに管理者を見たが、当の管理者は相

変わらずにこやかに微笑んでいる。

「それぞれの世界を混乱させるのはよくないからね。この町は奇妙な物も危険な物も多くあるし」

「この太刀なんかお気に入りだし、うちに持って帰って床の間にでも飾ろうと思ったのに」

ユズリは残念そうな顔で握りしめていた太刀を見下ろした。

「なかなかいい代物だね。八卦院の店のものかい？」

「そう。この間から狙ってたの。すごーおくすごーおく欲しかったの」

「そうかい。じゃあそろそろ此岸に帰るならその太刀はお父さんに預けなさい」

にこやかに言う管理者。

舌打ちするユズリ。

「すごーおく欲しかったのがやっと手に入ってたって言ってるのに、もう取り上げようって言うの？ お父さんの鬼」

「はいはい。お父さんは鬼でいいからユズリたちはそろそろ帰りなさい。もう此岸では夜明けも近いのではないかい？」

そう言われて十二階建ての塔を見上げてみれば、さっき見た時は確かに黒に近かった炎の色が鮮やかな藍色になっていた。

「あーあ。お父さんのせいで今日は代表者たちの所に行くしかできなかったじゃない」

ユズリが不満げに言うが管理者は穏やかに微笑んでいるだけだ。それ以上無駄だということは誰よりもユズリ自身が知っている。諦めて縁台を立ち上がって管理者に太刀を渡して遊佐に振り返った。

「あんたもクチナワのところで買った火薬を渡したらさっさと帰るわよ」

仏頂面でそう言い捨てるなり、ユズリはさっさと歩き出した。

「……本当にすまないねえ、人の都合も聞かないような子で」

その管理者の苦笑交じりに言葉が聞こえたのか、ユズリが眉を吊り上げてこちらを振り返った。

「今、何か言った？」

「いいや、何も。それじゃあ遊佐くん、君も気をつけてお帰りなさい」

「……はい。それじゃあこれ、お願いします」

火薬袋を受け取った管理者は、穏やかな口調も柔らかな表情も遊佐が今までよく知っていると置いていた管理者そのもの。つい先ほど覗かせた鋭さなど微塵も感じさせない。

遊佐は軽く会釈してからユズリの背を追った。追いながら背後を振り返ってみれば管理者は笑顔で手を振っていた。もう一度それに会釈して答え、ユズリの後をついていった。

追いついたユズリは不満そうに口を尖らせていた。

「あーあ。あの性悪オヤジめ。娘がこんなに懇願してるって言うのに。別に此岸で事件を起こそうっていうわけじゃないんだからいいじゃない？ こっちだって銃刀法違反で逮捕なんて御免被るし」

でもキレたら銃刀法なんて軽く破るのではないか、とも思ったが遊佐は黙ってユズリの横についた。

相槌を打つでもない遊佐になどお構いなしにユズリはひとり喋り続ける。

「いつもニコニコニコしているから腹の内が読めないったら。娘をからかう時も笑顔、叱る時も笑顔！ あのオッサンときたら笑顔以外の表情がないのかしら」

「……笑顔以外の？」

思わず口を吐いて出た遊佐の言葉にユズリは歩きながら答えた。

「うちのお父さんはいーつもあの胡散臭い笑顔なの。生きている頃から笑顔以外なんて娘の私だって見たことないわよ。お母さんなら知っているかもしれないけど、私の前じゃ笑顔以外見えた事ないわよ。まあ笑顔にもいくつかレパートリーがあるけど、怒ってるときだってそういう怒り顔って言うの？ そういうのは見たことないわよ。そもそもあんまり怒らないっていうのもあるんだけどね。叱ると怒るは違うじゃない？ だから娘歴十八年の私もお父さんの

笑顔以外の顔は知らない。町でだって笑顔以外のうちの親父を知ってる奴なんてそうはいないと思うわよ？ 笑う管理者なんて呼ばれているくらいだし」

「そう、なのか……」

実の娘のユズリですら……否、実の娘だからこそユズリは知らないのだろう。笑みを捨てた管理者を。この町のどんな異形にも劣らぬ威圧感を纏う存在を。

「何よ？ どうかしたの？」

ユズリが不思議そうな顔で覗きこんでくる。

「いや、何でもない」

実の娘だからこそ知らない。知らせたくない姿だってあるだろう。だからと言って、遊佐があゝの管理者の一面をユズリに黙っている義理もないが、余計な真似をすれば後々が恐ろしいのは先ほどしっかり釘を刺されている。わざわざそんなリスクを冒してまで意趣返し程度のために話すこともないだろう。

おつかいを終えて 6

それにしても濃い夜だった。たった一晚の間にああも強い個性を持ち合わせた連中と接することになるとは。

狐の金物屋。

遊女を装う刀狩り。

地獄落ちの薬種問屋。

恋に狂う女学生。

そして、笑みを被る管理者。

(……本当に何て濃い面子だ)

通りの真ん中を黙って二人並んで歩きながら、この町には奇人変人の類しかいなのではないかと思うくらいだ。代表者などと言うのだから彼らはその中の筆頭なのかもしれないが、隣を歩くユズリを含め、町に足を踏み入れるようになってから、いわゆる普通と称されるような相手にはお目にかかったことがない気がする。

奇人変人だからこそんな町に立ち入るのか。

そもそもこの町自体が普通とは到底言えないような場所だ。

生死の境。

彼岸此岸を隔てる三途の川の中州。

三途の川の話は此岸でもよく知られているが、一体誰がその川の中州に町があり、さらに居住する者までいると思うだろう。

そんな風に考え事をしていたせいだろう。

前方から歩いてきた薄汚れた着物に濃い髭をたくわえた男が肩にぶつかってくるまで全く気がつかなかった。

「いつてえ！」

往来で上がった野太い声に行き交う人々の視線が一瞬遊佐達に集まる。

遊佐は目を丸くしつつも現状を把握し、ぶつかった相手に一応の謝罪をする。

「あ、ああ。悪い。考え事をしていたんだ。大丈夫か？」

明らかに向こうがぶつかってきたのだろうが、ぼんやりとしてきちんと前を見ていなかった遊佐にも若干の非はある。そう思って頭も下げたのだが。

「ふざけんな！ てめえ、肩が外れたじゃねえか！ 一体どう落とし前をつけてくれるんだ！？ ああ！？ 治療費は払ってくれるんだろうなあ！？」

わざとらしく肩をさすり、男は凄まじい形相で遊佐に迫る。

山賊のような顔は確かに怖いのだが、言っていることはどう聞いたりしても当たり屋だ。わざとぶつかってきて相手に治療費を請求するという輩はいるのか。この男も人間に見えるが別の世界の住人なのかもしれない。そうだとしたらもしかするといかつい外見に反し、本当にあの程度の衝撃でも肩が外れるくらいか弱いのかもしれない。

「肩が外れたのか？」

「そう言ってるだろうが！ おお痛え！ 痛えよう！！」

なぜか痛そうには全く見えないのだが、本当に治療が必要なのだとしたら一体いくらくらい必要なのだろう。遊佐もユズリ同様、此岸の金銭などを両替商で換金してもらっているため少しは町の通貨の持ち合わせはある。だがそれは決して多くはない。

「ユズリ。この町での治療費の相場はいくらくらい……」

遊佐よりずっと町に詳しいユズリに意見を求めようとし、隣を見たところそこにユズリの姿はなかった。

不思議に思うより先、「ぶごおっ」と無様で美しくはない声が上がった。その声の主は当たり屋か否か判別しかねていた男で、丁度その彼が真横へ吹っ飛んだところだった。

「うるさい当たり屋ね」

不機嫌かつ高慢な声が、何が起きたのかを教えてくれる。

いつの間にか男の横へ回り込んでいたユズリは眉を吊り上げ、メートルほどの長さの木の棒を肩に担いでいる。

「あんた、ここの所この辺りで当たり屋やってるって男でしょ。大の男がつまんないことしてるんじゃないわよ」

吐き捨てるように言ってユズリは近場の店の者に担いだ木の棒を渡す。

「貸してくれてありがとう。ついでに番所に連絡してくれると助かる」

店の者は慌てて頷いて通りを駆けて行った。

ユズリはそれを見送ってから遊佐に振り返った。

「じゃ、帰りましょ」

「……ああ」

野次馬が物珍しそうに集っていたが、男がぴくりとも動かず倒れたままだ。

「あの男はいいのか？」

「番所のほうでどうとでもしてくれるから。ただ気絶してるだけだから放っておいていいわよ。それより早くしないと朝が来るし。急がないと」

もう男への興味などすっかりなくなしたかのようにユズリは先を歩き出した。遊佐もその後を追う。

ユズリは小柄だから追いつくのは簡単だ。その彼女のペースに合わせて歩きながら遊佐はふと思いついた。

「そうだ。さつきはありがとうな。危うく騙されて金を払いそうだったから助かった」

素直にお礼の言葉を口にすると、ユズリは一瞬虚を衝かれたような顔をしてから勢いよく顔を背けた。

「っ別に遊佐のためじゃないし！ 私が気に食わなかったから、それに当たり屋の常習だとかそんな噂もあつたし！ 私が人のためになんて働くわけじゃない！」

早口でまくしたてるように言うユズリはそっぽを向いたままだ。これ以上ないほどあからさまに照れている。

「けど助かったのは本当だから。ありがとう」

もう一度お礼を言うと、ユズリは顔を真っ赤にして早足に先へと歩き出した。

「別にお礼言われることなんてしてないから！ 私の自己満足にあんたがお礼を言う必要なんて全っ然ないんだからね！」

ああ、照れている。わかりやすく照れている。

何だ。あの高慢・傲慢・傲岸不遜は褒められると弱いのか。意外な発見だ。

そう思ったのはやはり遊佐だけではないらしく、道の端の若い男達もまた驚いたような感想を漏らしているのが聞こえてきた。

「照れてるなあ、管理者の娘」

「素直じゃねえよなあ、相変わらず」

「せっかくだから素直に受けとつときゃいいのになあ。不器用つつか何っつーか」

「褒められたり礼を言われたりするとああなんだよ。何だっけか？ 折継の奴がああいうのをツンデレって言うとか言ってたぜ」

なるほど、ユズリはいわゆるツンデレという性質だったのか。折継あたりならそれもまた面白いだか可愛いだか言ってユズリで遊ぶネタにしているのかもしれない。

遊佐の周りの野次馬達がこそそと話しているのを聞きながら、またユズリの後を追った。

その後ユズリは一切口を開かず遊佐の前方を歩いて行った。歩いてと言うか最早小走りだったか。

本当に何て濃い夜だ。

狐の金物屋に遊女を装う刀狩り、地獄落ちの薬種問屋に恋に狂う女学生、笑みを被る管理者……そして追加だ。管理者の娘のツンデレ刀狩り。

やはりこの町は一筋縄ではいかない。町の主だった連中は奇矯で異形で奇妙な連中ばかりだ。

とすると遊佐も町に出入りしているうちに彼らのようになるのか否、もしかしたらもう既に普通とは称し難い存在になっているのか

もしれない。

「それも複雑だな」

「……何が？」

橋の手前まで来て、ようやく口を開き振り返ったユズリの顔は強張っている。一見するとただ不機嫌なだけにも見えるが、多分まだ照れているのだろう。あくまで遊佐の希望的観測だが、そうとも思えばこの扱いにくい小娘も少しは可愛げがあるように見えてくる。「俺もいずれ変人になるのかと思うと複雑な気分だと思った」

そう答えるとユズリは真顔で遊佐を見詰めてきた。

「……あんたは今まで自分が普通だとも思っていたの？」

「普通だろう。俺はごくありきたりな平凡な人間のつもりだ」

ユズリは真顔でしばらく固まってから、やたらとはつきりした声音で言った。

「あんたはどう見てもどこから見ても変人の類よ。普通とは縁遠い変人。普通の人間がこんな町に入り込んで火縄銃ぶっ放したり、呑気に散歩気分で代表者相手になんかできるわけじゃないじゃない」

「……それは俺のせいじゃないだろう」

火縄銃を撃つ羽目になったのは一応ユズリ含め人助けのためだったし、まして今晚代表者たちのもとを巡らされたのはほぼユズリに強制的に引っぱり回されたというところが大きい。

それで人を変人扱いとはあんまりではないか。

「それ以外にもあんたは変よ。すごく変。天然というか何というか……代表者にも並べるくらい変！」

「そんなに変、変連呼するなよ。傷つく」

「能面みたいな無表情でそんなこと言われたって信憑性ないわよ」
言うだけ言ってユズリはいつもの調子を取り戻したのか、くるりと背を向けて橋を渡って言った。一步遅れて遊佐も橋へと踏み出す。そう長くない橋の下からは川のせせらぎ。

けれど橋の辺りには一面霧が立ち込めていて何も見えない。だから橋の外、此岸と町にどんな光景が広がっているのかは窺えない。

一歩先を歩くユズリの姿すら濃い霧に霞んで見えるほどだ。ただまっすぐ前を向き、行く先を見失わないだけで精一杯だ。

白く暈けた視界にぼんやりと緑が滲み始める。あれは此岸の橋の袂に生える柳だ。

もう帰るべき場所はすぐそばにあるというのに、まだ帰るのが惜しいと思っている自分がいた。あの不思議で危険で曖昧な町にまだいたいと、ほんの少し思っていた。

「あーあ。もう少し遊んで来たかったのに」

前を歩くユズリがそんな言葉を口にした。どうやら遊佐だけでなく、彼女も同じように感じていたらしい。

しかしこれはまずい気がする。

町の変人筆頭に名を連ねられるユズリと同じ思考を持ってしまうとは。これでは本格的に変人への道まっしぐらだ。

「……気をつけよう」

「はあ？」

堅い決意と共に吐き出した言葉に、ユズリが訝しげな声を寄越したが遊佐は「何でもない」と答え、あとはお互い黙々と橋を渡った。あと少しだけ、境界の町への名残を惜しみながら。

了

おつかいを終えて 6（後書き）

大した内容でもないのに随分がかかってしまいました迷い夜話、これにて完結です。もともと迷い夜行を書いた時点でこの迷い夜話に出てくるキャラクター達について書きたかったのですが時間もページもなく書けなかったので番外編扱いとして書きました。

特にこれといった驚きの展開があるわけでもなく、特にどんでん返しが起こるようなこともなくあっさりとした終わり方になってしまい自己満足で書いた感の強い話ですが多くの方に読んでいただけたようで嬉しいです。

何しろ今回登場のキャラクター達も皆癖が強いただけあって細かく設定があったりするので、いずれ彼らを中心にした話も書けたらいいなと思っています。

それでは長いことお付き合い頂き本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2669m/>

迷い夜話

2011年11月15日03時13分発行